

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black
1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25	26	27

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A	1	2	3	4	5	6	M	8	9	10	11	12	13	14	15	B	17	18	19
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

222.066
Ty996t



00038188

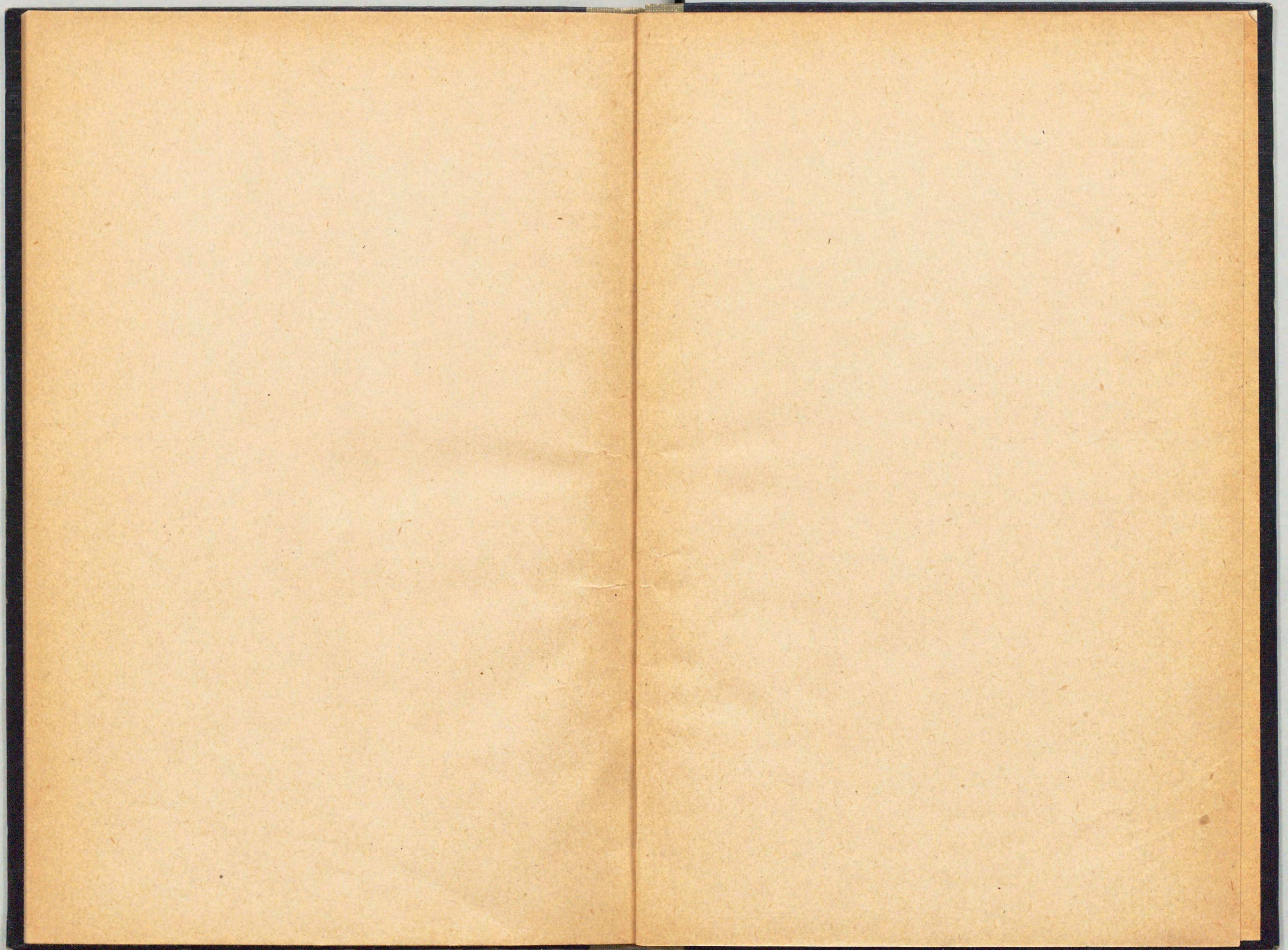
東亞問題別冊 第二

中國現代史研究委員會編
山本一郎譯

太平天國

生活社

38



中國現代史研究委員會
山本一郎譯編

東亞問題別冊第二

太平天國

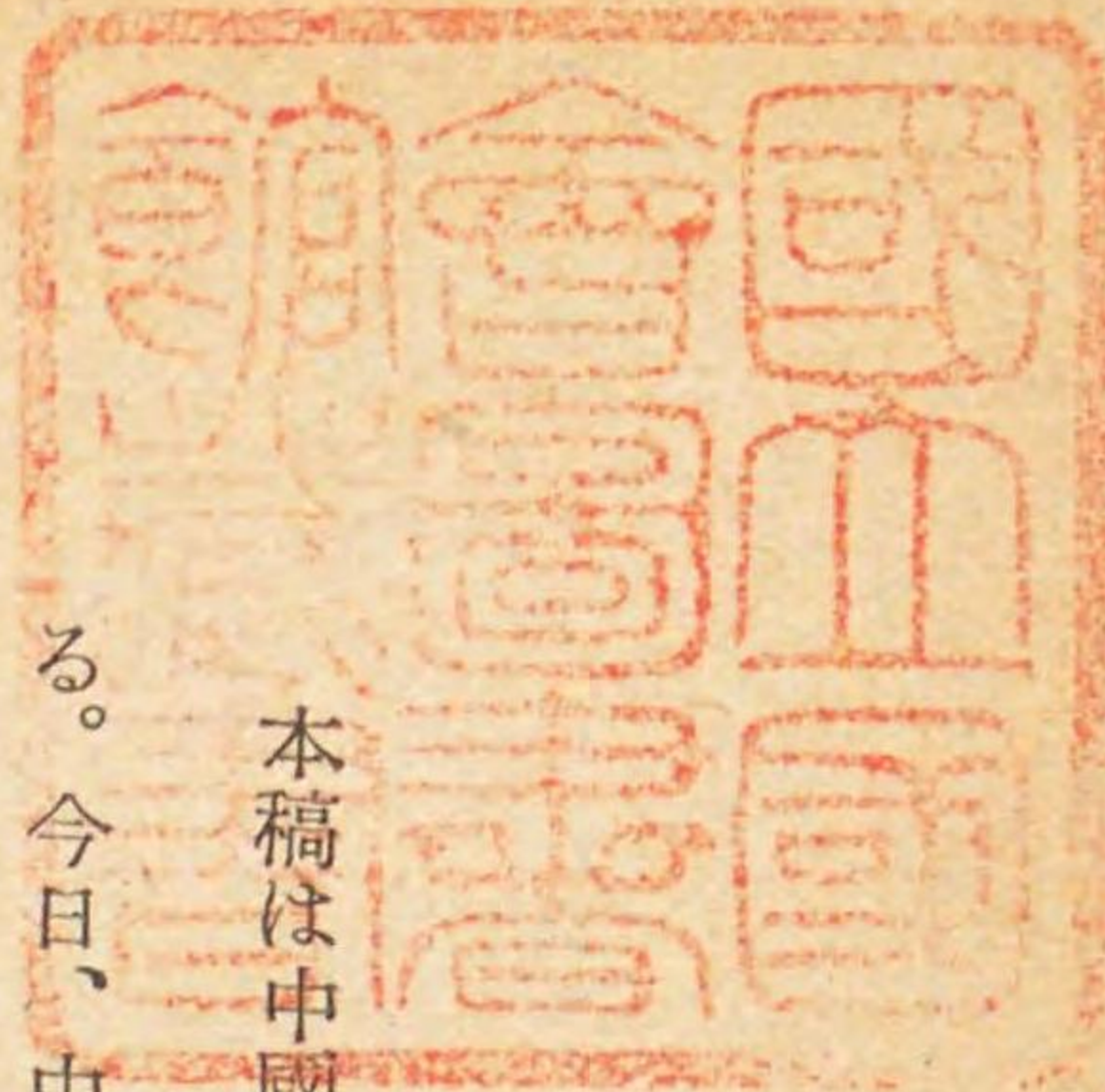
生活社

222.066
Ty 996 t
of II

はしがき

本稿は中國現代史研究委員會編『中國革命運動史』（民國二十八年四月）の第一講『太平天國革命運動』の全譯である。今日、中國に於ける土地問題の急迫をめぐつて、抗日政權の奥地に於ける政治經濟の再建設の動向が、この土地問題の何等かの解決を俟つことなくして何等の進展もなし得ないであらうことは周知の如くである。この時にあつて、中國近代史に於いて最も劃期的な近代化の基點をなした太平天國の運動を、いはゆる支那に於ける農民革命の問題として、より深く理解することは是非必要なことであらうと思ふ。

本稿は勿論讀者に於いて冷靜に批判的に讀まれることが希望される。何故なれば、それは中國人によつて中國人の民族的現段階の觀點より書かれたものであるからである。この著の調子高く且つ科學的精密さをいくらか缺く所以はここに在ると思はれるが、しかも猶ほこの激しさの中にも何等かの現實的意味が——我々にとつても又——充分含まれてゐると考へる。既に太平天國に關しての優れた邦文の著述もない譯ではないが、中國人の書いた最近のものとしては特に譯出するのも徒爾ではないであらう。



『太平天國』目次

(一) 外國資本主義の中國侵入前に於ける中國の政治經濟狀態	一
一、當時中國の社會經濟機構は封建社會經濟機構である	一
二、當時の政治制度は絶對專制政體である	六
三、當時對立した諸階層	九
(二) 外國資本主義の侵入及びその影響	一三
一、阿片戰爭	一三
二、英佛聯合軍と露支事件	一八
三、外國資本主義の中國侵入の影響	二三
(三) 太平天國以前の農民戰爭	二三
一、太平天國前の農民戰爭の經過	二三
二、當時の農民戰爭の特性と失敗	二六

(四) 太平天國の興起と失敗……………元

一、中國過去の週期的歴史の新しき再現……………元

二、太平軍の擧兵……………三三

三、太平天國內部の衝突と瓦解……………三六

四、革命への反攻と太平軍の失敗……………三九

(五) 太平天國の制度と政策……………四五

一、太平天國の制度と民族性……………四五

二、太平天國の原始共產主義ユートピア……………五〇

三、太平天國の政策……………五三

(六) 太平天國失敗の教訓……………五九

(一) 外國資本主義の中國侵入前に於ける
中國の政治經濟狀態

太平天國革命運動を明確に考量しようとするならば、必ず太平天國の社會的背景を正確に理解しなければならぬ。それには先づ外國資本主義が中國に侵入する以前の中國の政治經濟狀態を明らかにする必要がある。

外國資本主義の中國侵入前は、中國は正に滿清政府の統治せる時代であり、當時は一封建社會であつた。

一、當時中國の社會經濟機構は封建社會經濟機構である

當時、中國社會の主要な生産條件は土地であり、滿清皇帝は當時中國最大の地主であつた。滿清皇帝の支配後は圈を以つて標識(圈地)(註1)とし、直接漢民族の土地を收奪し、その掠奪した土地の一部分を直接に管轄し、皇帝の莊田と稱し、一部分は皇族王侯に分給し、これを宗室莊田(或ひは封地と稱す)とした。又別に一部分を滿洲軍隊(滿洲八旗)に分配しこれを旗地と云つた。この外に尙いはゆる駐防の莊田・屯田・官田(藉田・牧田・祭田及び學田を包括する)寺廟地等があつた。かくて明らかに、當時の土地の大部分は皇帝・官僚・貴族・地主の手中に操られてゐたのである。(註2)

一方農民に至つては、その有する土地は極めて僅少なるか、又皆無といふ有様であつた。同時に地主が農民の土地

を兼併することは盛んに流行し、いはゆる『近日田の富戸に歸するもの、大よそ十中五六なり、舊時田を有する人も今は一介の小作人となり、毎年の収入は一年の糊口をしのぐにも足らず』(湖南の巡撫楊錫綬の上奏書——皇朝經世文編卷三九)と云はれ、農民は寒さにふるへ、飢ゑに泣くの苦境にあつたのである。

地主と全統治階級は即ち土地の利用を獨占し、農民の收奪を専らにした。農民は地主に對して田租を拂ひ耕耘し、收穫の半數或ひは半數以上を正納し、しかもその外に禮物を捧げて地主を敬つてゐた。地主の家中に事があつたり、又農繁期に於いては、小作人は地主のために無償の勞働を行つた。而して統治階級は更に徭役制度を實行し、戦争或ひは皇室需要の時に當つては無數の農民を徵發して無償の勞働を強請し、このために死亡する農民は往々千萬を以つて數へる程であつた。かくて農民はこの殘酷な剝取の下に氣息奄々と喘いでゐたのである。

當時中國の經濟に於ける支配的なものは、自然經濟であつた。農民はその主要な生産物を賣るためではなく、自己の需要と、地主・官僚の需要に供給するために作り、商品生産は極めて僅少であつた。農民の上納する地租は主として穀麥等の農産品であり、農民の日常用具は主として自家製造に依つてゐた。生産技術は又甚しく遅れたものであり、土地を耕耘する道具も總て粗劣な犁耙に止まつてゐた。

商業に至つては、既に相當の發展を遂げ、特に鹽と鐵の營業は普遍的であり、これ等によつて又商業の中心をなせる所も少くなかつた(註3)。商人は猶一種の特權を取得し、衙門(譯註・役所官衙)に進出し、又官僚と氣脈を通じ結託することが出來た。商品交換の基礎は、一般的に云へばまだ地主が農民より收取する生産物地租に過ぎず、舶來の商品に至つては、多くは官僚・貴族が需要する奢侈品に留まつてゐた。商業資本の存在に關しては『農民の膏血を收

取するものはこの一點に凝結される。……それは一切の封建的なものを代表する——この種の原始蓄積の形式としての商業資本は、中國農村に於いて封建支配及び地主支配と一種特別の形式に於いて結合してゐる。商業資本は封建制度を借りて農民を剝削し、農民を壓迫する中世紀的方法である。』(史太林)

主なる大商人は本來一般的に又地主或ひは官僚なのである。この様に商業資本と封建勢力とは密接な關係を結成し、商業資本をして、封建勢力に依存して存在且つ發展せしめ、而して封建的經濟の附屬物となさしめてゐたのである。この外、商業の相當の發展によつて商行が形成された。現在猶ほ存在する會館(明末發生)、公所(清代發生)は、大よそ以前の商人ギルドの變相したものである。但し、これ等の商行は同様に官僚の扶翼下に組織されたものであつて、それを封建的なものゝ對立物となすことは出來ず、單に封建官僚の隸屬物に過ぎずと見るべきであらう。(註4)

最後に外國資本主義の中國侵入前に於いて、中國の手工業は既に相當の發展をなしてをり、手工業中主要なるものは、磁業・製鹽業・絹織業・鐵器業等であつた。但し手工業の生産は殆んど小生産規模であり、工場手工業は漸く現れ始めたのみであり、一般的に言つて單純商品經濟の手工業生産が優勢を占めてゐた。手工業行會は又既に出現したが、それは政治上に於いて極めて脆弱なる行會であり、專制政府に依存し、束縛されてゐたものに過ぎなかつた。

手工業はとるに足らぬ業とされ、同様に地主・商業資本・高利貸資本の殘酷な剝削を受け、更に國家の壓迫と制限を受け、加ふるに統治階級は手工業の包辦(官營工業)に對して工奴勞役制を施し、かくて手工業をして獨自の順調な發展を阻害したのである。(註5)

以上のことは、總て外國資本主義侵入前の中國の社會經濟機構が封建的社會經濟機構なることを明證してゐるであ

譯註

1、清朝支配確立後第一の土地の支配的所有の方策・いはゆる指圈の令を下して支那の豊穰の土地、軍事的（治安維持）に須要な土地を『圈奪し』圈地の農民に對しては『所有地の清掃』を行つた。この圈地によつて確立した新たな土地所有の種類は主として次のものである。

イ、皇室莊田、ロ、宗教莊田、ハ、八旗莊田、ニ、駐防莊田。

圈地は後康熙年間これを禁止したが、地主的な圈奪は永く行はれ、しかもそれは英國十五、六世紀のエンクロヂユアの資本主義化の端緒とならず、却つて「民地の圈奪者は」「地畝を漸次民衆に抵當に入れるを業とした」高利貸的方向に進んだ。

弄國青「中國土地問題之史的發展」邦譯・一五〇—一五四頁

薛農山「中國農民戰爭之史的研究」上册・第二三四頁

2、清朝支配下の土地制度は極めて複雑であるが、その基本的なものとして次の四形態を分つことが出来る。

- 一、民田（民賦田・更名田以下苗田徭田に至る二十一種の民田形態）
- 二、宮莊（前述・皇室、莊室、八旗、駐防の四種の莊田）
- 三、宮田（牧地、學田、藉田、祭田の四種）
- 四、屯田（直隸、新疆、西路、北路）

右の内一、以外は殆ど民地を圈奪したものであるが、就中二の官莊は清朝初期の反清農民暴動の主因をなした。

前掲・「中國農民戰爭之史的研究」第二三三頁以下。

3、鹽の手工業的生産及其の取引は支那の各地方に於て極めて古く行はれたが、清朝乾隆時代財政の増收を企圖して、特許的鹽商に『報效銀を出さしめ、これに優恤を加へ、先づ公定價格の加増を許し、又運搬に際しての減少を見越しての私鹽の夾帶を許し』た結果これによつて商人の利は莫大であつた。當時鹽商が竈戶（生産者）より鹽を買取りこれを「引地」にて賣却する時は、買入價格の百倍に達する時さへあつたとされ、これが特許的鹽商の官吏への巨額のコミッションによつて保障された。

外務省調査部「支那鹽政史概説」第六一—第六六頁（昭和十四年）

又『中國商業史』によれば、

『當代商家以二豪富二鳴者、山西票商與二揚州之鹽商。揚州爲二兩淮鹽商會集之所、有二揚商、運商、鹽商其統稱也。…揚州之鹽商資財各以二鉅萬二計、處二南北河運之中衢、二土流之歸往者、方諸戰國之四君…』

王孝通「中國商業史」（中國文化史叢書）第一八九頁

4、會館・公所 唐より宋代にかけての支那商人ギルドの端初的形態にては、同業商店の町及びその組合を行と稱し、清朝に入つて特に會館・公所が通稱となつた。而して公所は必ずしも同郷人に緣由しない、本來より商利を目的とするギルドであるに反し、會館は同郷人の團結を目的とする相互扶助及び善舉を意圖するものとして發達し、そのうちに同郷同業者を含むことから自然商業ギルド的性質をもつに至つたとされる。

加藤博士「唐宋時代の商人組合『行』に就いて」（白鳥博士還曆記念「東洋史論叢」第三一四頁以下。）

清水盛光「支那社會の研究」第一八頁・「清朝ギルドの特色」

又、支那ギルドの政治的無力、その官僚專制への附庸性に就ては、ウイットフォード、マザヤール等が都市に於けるアジア的官僚專制支配の強固さに、その原因を求めらる。

「支那に於ては、手工業的ツンプトも、商人のギルドも、また兩者の組織のなんらかの結合も、いまだ曾てかくの如き——イギリス・フロレンス・ドイツの中世都市ブルジョア階級の如き——權力地位を獲得しえなかつた、支那の農業的生産の特殊性を、迂迴的に反映するところの、その政治的要因を、支那の工業および商業の觀察にあたつては、つねに眼中におくことが必要である。」ウ氏「支那の經濟と社會」下巻第一二二頁

5、ウイットフォード前掲書下巻第四章・特に四・五・六

二、當時の政治制度は絶対專制政體である

當時封建經濟の基礎の上に構築された政治制度は、絶対君主專制政體である。滿清皇帝は最高のデスポットであり、その下に軍機處を設けて一切の大權を總攬し、省・道・府・州には總督・巡撫・司道・知府・知州・知縣等の官吏を分置し、各級の官吏は皇帝により直接に任命されてゐた。

漢族の反抗を防止するために、統治階級は一面いはゆる迴避政策を採用し——官吏はその出身の省内にて就職する能はず、近親は同じ衙門にて任官することを得ず、一面に漢人を制禦する政策を勵行した——官職はいはゆる「滿漢兩欠之分」即ち滿人を以つて之に充てる官職は、漢人を以つて充任するを得ず、漢人任官する時は、それに必ず同時に一滿人を置いてそれと拮抗せしめ牽制する様な方法を執つた（註1）。又中國の知識分子の民族思想を抹消し、消磨

し、滿清政府に誠忠を盡さしめるために、廣く因襲的な科擧制度（註2）を採用したのである。

統治階級が依つて立つた武裝的力量は即ち八旗である。滿洲八旗は滿族の軍隊であり、滿清政府の最も頼る可き武裝力量であつて、四通の都市・重鎮に分駐せしめ、以て全中國を支配統制したのである。この外尙ほ蒙古八旗（蒙古軍隊）、漢人八旗と綠營（漢軍）の編成がある。綠營の兵數は約六十六萬人であつて、各地の關所に分駐した。（註3）

それ等軍隊の組織は、滿朝政府の基礎の確立後は日に日に弛緩し、戰鬥力は又甚だ薄弱となり、規律は更に亂れて隨所に百姓を掠奪すると云ふ有様であつた。阿片戰爭當時、動員されて戦地に赴いた廣州の軍隊は「出動の初め沿途を劫奪し——甚しきに至つては長官を侮罵し、貧民を虐待し——避難する貧民を漢奸と稱して、その財物を掠取した。」（王鈞宰・金壺浪墨卷三羊城日報）（註4）、阿片戰爭の失敗は、即ち滿清軍隊の腐敗無能を暴露するに充分であつた。その武力はかくの如くではあつたとは云へ——それ故にこそ滿清政府は尙ほ、この武裝力量によつて民衆を壓迫剝削し、その絶対的君主專制政體の統治を維持したのである。

譯註

1、「滿人と漢人との間にはもとより明かな差別待遇があつた。一九〇二年の初めまで滿漢通婚は禁ぜられてをり、最高官職並びに重要な地位には、常に滿人が優越的な比率で配置されてゐた。殊に最高軍權は最後まで滿人の手から離れなかつた。民間の政治批判は如何なる形式によらうとも死刑を代償とせねばならなかつた。」王樞之「孫文傳」（改造社版）第二六頁（傍點譯者）

右に於て、傍點の個所を特に問題としたのは、次の意義をもつ。後出太平天國亂鎮壓の殊勲者である曾國藩が、咸豐二年長沙に於て湘軍（後出）を編成、鎮壓に参加して以來、咸豐九年、滿洲八旗の正軍たる江南江西兩大營が革命黨によつて潰滅せしめられるまで、決して全軍を總理すべき地位を與へられなかつた。かくして曾は滿洲朝のためになく、「彼は漢人の宗教、漢人の風俗、漢人の固有の習慣を自衛せんが爲めに起つた」（稻葉君山「曾國藩論」）とされる。だがこゝに曾國藩の反動性、と同時に、太平天國を劃期とする漢人支配層の滿洲朝に對する實質的優越性——後の辛亥革命に於ける袁世凱の役割に通ずる——歴史的基點が與へられたのである。

矢野仁一「近代支那史」第三九四頁

稻葉君山「近世支那十講」第一六〇頁

2、科擧制度がもつた歴史的意義、その支那官僚制劣悪化に與へた影響については張之洞の「勸學篇」九章第二節に明確である。

王樞之「孫文傳」第三二頁註二

陳青之「近代支那教育史」邦譯・第一一一一二頁

3、滿洲八旗は、清朝統治の軍事的支柱であるが、八旗はこの外蒙古八旗、漢人八旗（綠營）あり、この三種の八旗は夫夫鑲黃、正黃、正白、正紅、鑲白、鑲紅、鑲藍、正藍の八色の旗別に編成、北京を中心とし、政治的樞要地より邊境關所に及ぶに従ひ夫々滿、蒙、漢の構成に配備された。これらの旗營に分配された土地は極めて廣大な面積に亘り、概そ一

三、五〇〇〇、〇〇〇畝^{モッ}に上つたとされる。

前掲「中國農民戰爭之史的研究」上册第二四〇—二五〇頁

4、旗營、綠營の墮落化については、王闈運の「湘軍志」「營制篇」に詳細に記録されてゐる。

前掲矢野「近代支那史」第三六七・八頁

稻葉「近代支那史」第四四三・四頁

「民間徒だ其の惶怖すべきを知つて、其の去らざるを恨む」「人民に避官近賊の議起り」（湘軍志）

三、當時對立した諸階層

外國資本主義侵入前、中國封建社會の主要な階級對立は即ち地主と農民である。この主たる階級對立の基礎の上に、當時の二個の對立的集團、即ち一方に××・貴族・官僚・軍官・地主・大商人・士大夫と云ふ壓迫し剝取する集團、他方に農民・手工業者・城市貧民・流氓・失學貧困の知識分子と云ふ、被壓迫・被剝取の集團が形成されてゐた。皇帝は本來一大地主であり、中國の尠大な土地を占有してゐた。貴族・官僚も又本來同じ一地主であり、商人と土地とは又密接な關係を持つてをり、士大夫は朝に在つては官僚となり野に在つては豪紳地主となつてゐたのである。

これ等の收取する階層は、即ち政治と經濟力量を利用し、農民に對して壓迫と剝取とを行ひ、農民の土地を獨占し、土地の利益を獨占し、農民に對して經濟外收取を行ひ、農民（それが彼等の剝取の主要な對象であつたが）、手工業者・貧民・流氓・貧苦の知識分子をして凍えと飢ゑとに陥れ、抜け出られぬ深淵に落し込んだのである。官僚機關は盡く民の血を吸取り、貪慾に汚れ、法を枉げ「富貴なる者惡を重ぬること限りなく、貧しき者は轡を箝められ身を伸すことも出來ぬ」（天地會の首領萬大洪の討清の檄文より）といふ有様であつた。

士大夫は即ち人民を吸血し、惟だ利の趨くところ』（朱琦・柏根山房文集書後）に至り、又『權勢を頼み、私を營み、終に恥を知らず』（義知書屋文集）であり、軍隊は即ち『貧民を鞭ち』『財物を掠取する』の状態であつた。地主はその政治經濟權力を利用して民田を兼併し、『舊時田を有する人も今は總て小作人となつ』たのである。地主商人は更に『富商の登場の後は、適當な價格や廉價な品物はなく、糧價の高低をほしきまゝに操り』（皇朝經世文編）民の膏血を吸ひ取つてゐた。

高利貸流の削取に至つては『秀才も借金を返せねば、又杖笞の罪を免れず、平民は知るべし』（太平天國史綱）、この様にして兩者の對立的集團の不斷の鬭争が形成されて行つたのであつた。

その上、清朝の統治下に在つては、階級的壓迫の外に、又國內の民族的壓迫があり、滿清政府は國內のあらゆる種類の民族的反抗に對して均しく最も殘酷なる壓迫と虐殺とを行つたのである。このために群集は大規模に騒動と反抗を惹起し、臨清・蘭州・臺灣等に爆發したところの農民、貧民の暴動は、三點會（註1）或ひは捻黨（註2）の組織と鬭争にまで發展した。

以上は、外國資本主義侵入前の、又外國資本主義が將に東進を開始し、閉された門戸を叩かんとした時に於ける中國の政治經濟の概括的スケッチである。

譯註

1、三點會 後出・三合會・天地會と同系統にして『五色を以て旗幟となし、秘密の口號、圖樣などを會員の證となし、

各省の吏役兵丁を羽翼となし』『天地會徒・三合會徒の誦する詩句は同一にして五色を以つて旗幟となし、洪家兄弟と稱するも同一なり。』

矢野・前掲書第二八六頁

2、捻黨 『清の嘉慶年間、山東・江蘇・安徽三省の境界に於て鄉民が神を迎へ賽會をなすに紙燭（油紙捻）を燃して龍戲をなす風習あり、咸豐年間これらの者黨を結びて北部數省を擾掠す。これらを捻子又は捻匪と云ふ。』（湘軍志・湘軍記）

矢野博士は右通説に對しむしろ「平定粵寇紀略」（卷三）に記された『捻者擄也。不逞之徒聚擄成隊、肆劫掠、俗謂之捻云々』が正しいのではないかとされる。

矢野・前掲書第四一六頁

(二) 外國資本主義の侵入及びその影響

111

十九世紀時代、西歐の資本主義は正に向上發展の途にあつて、積極的に商品の販賣市場を探し求め、殖民地の爭奪を行つてゐた。中國は領土廣大にして人口夥多であり、天然の産物又豊富である故に、西歐資本主義の侵略にとつて最も好個の對象となつてゐた。ここに於いて各資本主義國家は争つて中國に商品を輸出し始め、中國領土内にて販路を求むるに至り、積極的に中國との通商を要求した。

然しながら當時滿清政府は却つて外國との通商を拒絶し、到る處にその鎖國自守の政策を固執したのである。この種鎖國自守の政策は、一方で中國が中世的封建社會經濟機構を以つて大工業生産品に對して頑固な抵抗を試みたことを反映してゐるのであるが、他方又この種の政策を推進した一つの主要な原因は「すなはち清朝政府は、大部分の支那人が、曾て十七世紀の初期即ち滿清の支那支配確立の最初の五十年間に懐いてゐたところの、あの滿洲人は彼等を奴隸とするのだと云ふ不滿の感情を、外國人が助長することを恐れたのである」(註1)

然しながら外國資本主義は、銃砲を以つて中國の鎖國政策を粉碎し、中國の萬里の長城を打開してしまつた。これが先づ一八四二年の阿片戰爭である。(註2)

一、阿片戰爭

先進資本主義國——英國は産業革命後、積極的に外國に向つて侵略を開始し、東方に於いては侵略の大本營東印度會社に根據を置いて、先づ中國に向つて侵入を始め、廣東を経て中國と貿易を進むるに至つた。當時英國が中國に輸入した主要な商品は綿織物と阿片であり、就中阿片がその最たるものであつた。(註3)

一八三〇年來、印度より中國に輸入する阿片は日と共に増嵩し、その對支輸入貿易額に於いて百分の六〇以上を占めてゐた。阿片を中國に輸入する結果は中國の銀貨を流出せしめ、銀價は暴騰した。統計に據れば、一八二一年——一八三九年に於いて、中國の阿片輸入によつて外流した金銀は竟に三〇〇、〇〇〇、〇〇〇兩に達した。別の一統計によれば、一八二七年——一八三三年に於いて中國の金銀の輸出は三七、〇〇〇、〇〇〇兩以上に達してゐる。一八三三年後、金銀の外流は更にその弊を増したのである。即ち一八三八年一ヶ年に於いて中國から流出した金銀は、正に一〇、〇〇〇、〇〇〇兩以上に達した。

かくしてこの事は直接に滿清政府の財政收入の激減となつて現れ、當時の財政危機を造り出したのである。加ふるに、又人民の生活に劣悪な影響を與へ、彼等に阿片の流毒を感染せしめ、同時に一層商業高利貸資本の農民手工業者に對する收取を増強したのである。その上遠く阿片戰爭前に於いて、外人は已に早く直接間接に中國人に對する高利貸的收取に参加してゐたのであつた。

當時滿清政府は輿論の壓迫下にあつて、嚴重に阿片禁煙の辦法を採用し、阿片の輸入を禁絶した。一八三八年十一月、兩廣の總督林則徐は廣東に赴任するや、先づ英商と結托せる華商數名を捕縛してこれを死刑にし、英商を威嚇し、これに命じて阿片を取出させ、これ等總てを燒却に付してしまつたのである。

112

かくして、阿片戦争が爆發した。

一八四〇年（道光二十年）英國の海陸軍は廣州・厦門を攻めて未だ勝利に至らなかつたが、轉じて浙江を攻め定海を陥し、甯波を圍み、七月渤海を窺ひ、大沽口に入るに至つて、遂に清廷は英國と和を議し、林則徐を罷免し、別に琦善を以つて欽差大臣とした。琦善は廣東に至り、悉くその守備を撤回するに及んで、英國は更に苛酷な要求を提出するに至つた。十二月に和議草稿が起されたが、英國は再び軍事行動を開始し、清廷又主戦を決議したのである。ここで英軍は進んで虎門を陥れ、珠江の要塞を占領したので、清廷は再び和を求むる事になつた。當時和議は既に成つたのであるが、英國は、清廷が未だ返答すべき六項の要求及び香港割讓の約束を肯んじないと云ふに藉口して、更に兵を進めた。

一八四二年四月より六月に至り、英國は先づ吳淞・上海・鎮江を陥し、直ちに南京に逼つた。清廷は大いに驚き、遂に英國と和議を結び、七月清朝政府と英國とは條約十三條を南京に於いて訂結した。これが即ち南京條約であつて、その主要内容は次の如くである。

- 一、清朝政府より賠償金二千一百万兩を英國政府に納與す。
- 二、香港を永遠に英國に割讓す。
- 三、廣州・厦門・福州・寧波・上海を通商港に開放し、又英國人をしてその家族と共に寄居することを許可し、又領事館を設立す。
- 四、英國の貨物が入港し、規則通り納税後（税則は須く公の議定にて公平を期す）は中國商人によつて總ての内

地に運搬するを許し、通過の關門にて誅税を加重するを得ず。

南京條約の訂立後は、米佛兩國は逸早くその利益を奪はんとし、支那の英國に許した利益に均霑せんことを要求した。ここに於いて滿清政府は又、米佛とも清米條約、清佛條約を締結し（一八四四年）、これ等の兩種の條約訂立は、直ちに米佛の在支領事裁判權の確立となつて結果したのである。

滿清朝廷はその軍隊の腐敗甚しきに由つて、阿片戦争に慘敗したが、然しこの戦争は又却つて中國民族の抵抗力を顯示することにもなつた。一般的に滿清軍隊は固より腐敗の極にあつたが、然し英軍は廣州に於いて軍隊と民衆の頑強の抵抗に遇つた外（註4）、又英軍が正に鎮江城に肉迫した時には、中國軍隊は又英雄的な一幕の劇的抵抗を演出したのである。

それよりすつと後になつて恩格斯はこの當時の様子を描寫して、この戦に於ける中國軍隊は『總てで僅に一千五百人であつたが、彼等は却つて勇敢に死を決して抗戦し、全軍全滅に及んで初めて抵抗を止めたのであつた。應戰以前に於いて、彼等は早く既に戦争の結末を慮り、自己の妻子を絞死或ひは水死せしめたものの様である。——清軍の副都統は戦鬪の既に慘敗に遭ふを看て、遂に自己の居屋を焼いて自らも又火に飛込み死を求めた。この時の戦鬪に於いて英國の死者一百八十人を算へた。』と書いてゐる。

戦争中に於いて、廣東の民衆は數萬人を以つて平英國（註5）を組織し、又各地の民衆が自衛的に蹶起する者相繼いだのであつたが、これ等は特に當時中華民族の猶ほ滅亡すべからざることの明證とされるであらう。當時、中國が第二の印度と變らずして、その身を完うし得たのも決して偶然ではないのである。

1、馬・恩全集（邦譯）第六卷第八八頁
 2、『英國の武力に面しては、滿洲王朝の威信は、脆弱なほくちの様に壊滅し、天上帝國の永遠性の迷信的確信も倒潰し去つた。文明世界よりはなれて、未開な密閉的な状態にあつたのが今やその破口を打開されたのである。』『天上の帝國支那をして地上の世界と接觸すべく強制した英國の武力（加農砲）によつて……丁度密閉された棺内に保存されたミイラが、新鮮な空氣に觸れるや否や、たちまち瓦解してしまふ運命にあると同じく、この孤立は確實に崩壊に立到つた。』（一八五三年・「支那及び歐洲に於ける革命」）

右全集第六卷第八三頁以下。

右を、乾隆時代英國が、初めて北京朝に、正式に支那との通商を求めた時、乾隆帝がこの「夷狄」使節に對して與へた傲岸な覆答書に對照することは極めて興味がある。

『……天朝物産豊盈、無所不有。原不籍外洋貨物、以通有無……』（十朝東華錄）

前掲「農民戰爭之史的研究」第二八八頁

3、支那の英國商人による阿片の輸入は、雍正七年（一七二九年）僅に二〇〇箱であつたものが一九世紀に入つてから俄に増大しその密輸入のみにて次の如く記録されてゐる。

年 代	密輸箱數
一八一七年	三、六九八
一八二四年	七、二二二
一八二八年	九、五二五

一八三二年 一六、二二五

一八三八年 二八、三〇七

前掲「孫文傳」第六八頁

4、5、阿片戰爭第一段階の直後一八四〇年舊十月、清朝政府の特派全權琦善と英當局は廣東で正式談判を開始した。結果、香港割讓、價金六〇〇萬兩等の拒絶の爲に再び英軍は攻撃を起し、斯して第二回目の和議交渉となり清朝皇族奕山がその交渉全權として廣東に到つたが、無爲無能にして一八四一年舊四月極めて屈辱的な交戦條約を結び、その條約中第二項に軍費辨償として一週間に六〇〇萬兩を支拂ひ、内百萬兩は即日交付の事の一條があつた。奕山は右六百萬兩の價金を廣東民衆の負擔とし内四百萬兩を藩司、連司、海關の三庫に命じ、残る二百萬兩を一般商人人民に課し半ば掠奪的に徴收した。此間英兵の廣東市内に於けるほしほの暴行沙汰があつて、民衆は極度に憤激して英兵が三元里と云ふところを通過する時「平英國」の旗をおしたてゝ襲撃し間もなく老幼男女の農民、百三村數萬も蟻集し英兵を包圍し、英人英兵二百名を殺した。その後價金を受取つた英兵が廣州を引揚げる時再び民衆は立つて彼等を火攻めにし、自分達の財産を奪回しようとした。又佛山の廣州義勇團は龜艦砲臺を攻めて英兵數十を殺し、應援の兵船を撃破した。南京條約後も廣東に民衆の反英義勇團組織され、廣東に入る一人の英兵をも我等の愛國心で防止すると宣言し一八四二年十二月、民衆は大會を開いて暴動化し、英國、和蘭等の商館を焼いた。

『支那の革命を語る場合、吾等は阿片戰爭を忘れてはならぬ。と同時に平英國事件以後數年に亘る廣東人の反英闘争を忘れてはならぬ。蓋し前者は支那を資本主義諸國の半殖民地として提供したが、後者は自然發生的な愛國運動ではあるが、支那の反帝國主義運動史の第一頁を飾るものだからである。』

前掲「孫文傳」第六七・六九―七二頁・又・次節恩格斯的引用文を参照。

二、英佛聯合軍と露支事件

阿片戦争及び戦後に於いて、廣州の群集は反英運動（平英團を組織する等）を興し、先に英人に對して重大な打撃を與へたが、南京條約訂正後と雖も、英人は廣州に入ることが出来なかつた。阿片戦争後に於いて、南方は絶えず外國の侵略反對の闘争を行つた。正に恩格スの言ふ様に『民衆は外人反對の闘争に積極的に更に熱狂的に參加した』（註一）のであつた。

この種の闘争はおよそ、何等かの原始的な行動の形で行はれた。これ等の原始的行動は正に恩格スの言つたものに近い。即ち『我々は全く英國の貴族新聞がどの様に支那人のおそるべく殘虐な行動を責めたかと云ふ様なことを要求するのではなくして、この行動は自己の生存を爭取した戦争であり、支那民族を保存する事を希つた人民戦争であると云ふことを承認するのである。——奮起した民族が人民戦争中に於いて採るところの手段に對しては、通常行はれる戦争の公認された法則の觀點に根據を置くべきではない。或者は何等かの抽象的標準を根據として、これに推測を加へる。然し只この奮起した人民がそれまでに到達してゐた何等かの文明程度に基いてのみ考量を加へるべきであらう』

一八五六年英國はアロー號船事件に藉口して廣州を攻落し、強盜を保護する船隻のために對支第二次戦争を行つた。然し終に廣州群集の反英闘争の壓迫に因つて、暫くして再び廣州を退去した。

一八五七年十一月、英佛は（宣教師が廣西で害を受けたと云ふことに藉口して）聯合軍を組織し、再び廣州を陥し

總督葉名琛を俘虜とした。一八五八年三月、英佛聯合軍は北上して大沽に入り、その砲臺を攻陥したために、ここで清朝政府は和を求めて、英國と天津條約を訂結した。天津條約訂結後、翌年北京に於いて條約の交換並びに批准を規定した。但し一八五九年英佛公使が北京に赴くの時、清朝政府は軍艦護送と公使入港を拒絶したことによつて、再び英佛聯合軍は天津・北京を陥し、かくして清朝政府は又英佛と和を議して、いはゆる北京條約を訂立したのである。

（一八六〇年）

當時、露國皇帝は戦争が全く了つた時に於いて干渉に乗り出し、結局調停に功有つたと云ふことに藉口して清朝政府に迫り、露支天津條約・露支北京條約を締結した。この外更に英佛聯合軍との戦争で滿清政府が北邊を顧る暇なきに乗じて、黒龍江以北の支那領土を占領し、事後は即ち滿清政府を強迫してこれと愛琿條約を訂結し、その既得權益を承認せしめたのであつた。

天津條約の主要なる内容は次の如くである。

- 一、南京條約は繼續して有効とす。
- 二、牛莊・登州・臺灣・潮州・瓊州を開いて商港とす。
- 三、英國人民の訴訟は、刑民を論ぜず均しく領事裁判に歸す。
- 四、英國人民は中國内地に於いて遊歴するを得、揚子江流域各港は英國商船の自由通商を得せしむ。
- 五、英國のキリスト教徒及び天主教徒の自由傳道を許す。
- 六、四百萬兩の賠償をなす。

七、關稅協定を承認し（百分の五）中國政府は各國の承認を経ずして關稅を増加するを得ず。當時佛國と訂結せる條約は大略英支天津條約と同じものであつたが、條約中又、佛國を最惠國となし、賠償は佛國軍費二〇〇萬元となすことを承認せしめた。

北京條約の内容は、

- 一、天津條約を繼續有効となす。
- 二、更に天津を開いて商港となす。
- 三、九龍の半島を割讓して英國領となす。
- 四、賠償金は、英佛軍費及び損失費八百萬兩に増加す。

露支天津條約の中、主要なるものは、露國をして支那に於ける自由通商並びに領事館設立を准許することである。又露支北京條約に於いて最も中心的な内容は、實にウスリー江以東の土地を露國に割讓することであつた。又愛琿條約（一八五八年四月訂立）の主要内容は、

- 一、黑龍江以北を露國領地となすこと。
- 二、黑龍江・ウスリー江・松花江は唯だ露支兩國の船舶の通航及び兩國人民の貿易のみを許す。と云ふにあつた。

譯註

1、前節譯註4・5を参照せよ。

三、外國資本主義の中國侵入の影響

南京條約・天津條約・北京條約・愛琿條約の訂結は、中國をして多くの權利を喪失せしめ、外國資本主義國家をして中國に於ける各種の利益を奪取せしめたのである。

即ち、第一に、二回の戦争の失敗は、賠償金をその額三千余萬兩に達し、中國の財源をして外流せしめ、外國資本主義は却つてこのために巨億の財富を獲得したのである。

第二、中國は香港・九龍・黑龍江以北及びウスリー江以東の廣大な領土を喪失し、外國資本主義は却つて中國を侵略するの據點を取得した。

第三、多くの商港を開き、外國商品の中國に於ける自由進出を許し、かくていはゆる「廉價優美の攻撃力」を以つて、中國を掠奪することになつた。

第四、關稅自主權を喪失し、中國をして關稅を高める權利を失はしめ、かくして中國の民族工業發展に對する一種の保障を奪つて、外國資本主義が思ひのままに中國に於いて不等價交換を行ふを得せしめたのである。

第五、領事裁判權を承認し、外人は中國に於いて勝手な行爲を振舞ふことが出來、外人をして中國に遊歴し探索し傳道するの自由を許した結果は、外國資本主義が中國を侵略するための探偵或ひは尖兵が深く、中國の胸腹の中に入り込むことの出來る様にせしめた。

第六、外國の軍艦・商船が中國の内河を航行するを許したが、これは實際に於いては即ち外國の武装力量が中國内地に於いて自由行動を執るを許したものである。これより後は外國資本主義國家は、即ち武力を以つて中國を威脅し、中國を制御することの出来る様になつた。

最後に尙ほ、いはゆる特惠條文を訂立したことは、外國に特惠權を與へることになつた。外國資本主義は支那に於ける各種の特權を取得し、更に一步を進めて中國に向つてその侵略の魔手を伸したが、先づ商品の中國内地への大量輸入は、中國の手工業をして日に日に破産せしめ、農村經濟をして又迅速に没落せしめ、かくして廣大な農民と手工業者をして外國資本主義の侵略下と、中國統治階級の強加する收取下にあつて、失地失業の途を急速に辿らしめたのである。

外國資本主義の中國への侵入に於ける別の一影響は、即ち滿清政府が巨額の賠償金を支拂ふために、廣大な大衆に對する收取を強化することによつて人民の生活をして更に一層悪化慘落せしめ、收取階級と被收取階級間の鬭争をして更に一段と尖鋭化せしめたことである。

外國資本主義の侵入は、中國全體の政治と經濟生活中に於いて、明らかに二個の相異つた趨勢を産み出した。即ち一面に於いて滿清政府は外國資本主義の壓力下に屈服投降し、漸次外國資本主義に頼つてその統治を維持する傾勢に赴き、他方に於いて即ち廣大な民衆は外國資本主義と滿清統治の壓迫收取の下に於いて、廣大な滿清統治反對の民衆運動を展開したと、これである。

(三) 太平天國以前の農民戦争

滿清政府が統治に乗り出した當時は、殘虐な手段を用ひて滿清の支配に反對する漢民族を殺戮し、『揚州十日』、嘉定三屠』は即ち最も著名な虐殺である。以つてその統治を鞏固にしたのであつた。然しながら滿清政府の殘酷な收取下に在つて、中國農民の滿清と地主に反對する鬭争は、遠く太平天國以前に於いて既に興起して居り、連綿として絶えることのない農民戦争となつて現れたのであつた。この種の農民戦争は正に太平天國革命運動の先驅と云へるであらう。

一、太平天國前の農民戦争の經過

一七七四年、山東兗州の貧民數千武装蜂起し、壽張・堂邑・陽谷の各縣を攻め陥し、臨清を圍攻した。指導者は王倫である。

一七八一年、甘肅の回民(譯註・回教徒)は馬明心の指導下にあつて蹶起を企圖したが、結果に於いて指導者は統治階級のために捕へられた。是に於いて回民は武装群起して蘭州を圍攻し、滿清の支配と血戦すること數ヶ月に及んだ。一七八三年に至り甘肅の回民は馬明心の復仇のためと相呼號して立ち、通渭の石峯堡に武装蜂起した。

一七八六年、臺灣の林爽文は貧民を指導して鳳山に兵を起し、彰化・諸羅・淡水等數縣を攻め陥して不斷に統治階

級と戦つた。

一七九五年に湘黔邊の苗民（譯註・苗族。湖南・貴州・雲南・四川の地方に住居する種族）は統治階級の土地強占に反對して鬭争を起し、乾州を陥し、保靖・秀山・松桃・銅仁等の地を攻めて、前後十數年に亘つて滿清政府軍隊と抗戦を續けた。

これ等の擧兵は、後に均しく滿清政府のために鎮壓し去られてしまつた。然しながらこれに繼いで起つたのは即ち一七九三年——一八〇二年に北方五省に於ける有名な白蓮教暴動である。（註一）

白蓮教はもと、元來漢民族の志士が假に佛教迷信に名を藉り、これによつて元を驅逐することを宗旨としてゐた一種の秘密結社である。その力量は頗る大であつて、明代に於いて白蓮教に参加する農民貧民は竟に約二三百萬に達した程であつた。滿清が中國を統治するに至つた時、白蓮教は『興漢滅滿』のスローガンの下にあつて、滿清政府反對の鬭争を進め、一時これに附隨する者極めて多くの數に上つた。乾隆帝の末年、河南の白蓮教首劉之協等は一小童を奉じて、明の末裔朱姓を假稱して密かに擧兵を謀つた。

一七九三年（乾隆五十八年）に事が發覺し、多數の教徒が捕縛の後殺された。唯、劉之協のみは逃走したので、清廷は命を下して彼の逮捕を追求し、宜荆等に於いて連坐する者數千人に及んだ。ここに至つて白蓮教の暴動は遂に起つし、荊州・襄陽先づ兵を起し、未だ數ヶ月に及ばないうちに暴動は湖北・四川・陝西・河南・甘肅の各省にまで蔓延し、蹶起せる群集は到る處地主・官僚の財産を沒收し、又、滿清の統治に抗戦して戦争を堅持すること十年に垂々とし、結局挫折するに至つたのである。

北方白蓮教の擧兵が失敗した後、繼いで南方に又『海寇』の騷動が起つた。（譯註・艇盜の亂とも稱される）南方の海寇は失地失業の農民と貧民のために聚集して成つたもので、福建省の海邊を根據地としてゐた。一八〇三年、その首領蔡牽は隊伍を率ゐて浙江の境を攻め、一八〇七年又清軍と廣東の海邊に於いて戦ひ、一八〇九年に至つて始めて清軍のために消滅せしめられた。

久しからずして北方に又天理教の暴動が爆發した。天理教はもと白蓮教の一支流であつたが、晉豫魯（譯註・河南省山東省等）等の數省に廣く布教され、李文成・林清を以つて領袖とし、加入者數萬人に達してゐたが、多く貧農手工業者であつた。一八一三年李文成が捕縛下獄したために遂に暴動が起り、群集は滑縣を攻め破つて文成を奪ひ出し、同時に又林清も北京に於いて事を起した。擧兵の區域は蔓延して魯冀豫の各省に波及したのである。

最後に、南方に於いて流行しゐた天地會（又三合會或ひは三點會と稱した）の組織は、福建より廣まつて珠江流域及び長江流域に及び、狭小な『亡國の志士』の組織より漸次發展して廣大な群集の組織となり、南方に於いて不斷の鬭争を進めてゐた。その目的は『吾人は仇敵を討滅して、明朝を恢復す』（天地會誓文）と云ふにあつた。

この外太平天國前にあつては、各地に猶ほ零細な暴動が少からず發生した。例へば陝西省三才峽の箱職人の暴動、又江西の胡秉輝の亂、一八二二年八月の河南に於ける教民の暴動、一八三五年山西趙城に於ける教民の暴動、一八三六年湖南武岡教民の暴動、一八三八年貴州に於ける謝法眞の暴動、湖北崇陽の農民鬭争、湖南萊陽の農民一揆等々がそれである。

1、白蓮教の亂は、典型的な封建的農民戦争と稱すべき巨大な一揆であつた。白蓮教は元來彌勒掌教の理想世界實現を求めて現實政治に反對すると云ふ封建農民的秘密結社であり、その由來は古く、明の太祖もこの教を利用して天下をとり、後禁絶した。清朝嘉慶時代の劉之協の叛亂以來、從來の清朝政府の宗教結社懷柔政策は一變して、積極的な禁壓捕殺の策に出た。この清朝政府の政策轉換は、後の太平天國の組織行動に極めて大きな影響を與へてゐる。

白蓮教の亂に於て今日我々に興味あることは彼等の叛亂戦術が全々ゲリラである事である。當時民間に於て次の如き俗謡が流行した『賊至兵無影、兵來賊又沒蹤、可憐兵與賊、何時得相逢。』又嘉慶六年陝西軍務合辦長麟の上奏に次のやうな言葉がある。『教匪もと流賊にして食に遇へば使ち食し、屋に遇へば即ち舍し、但だ一械を持すれば、もつて横行し、鍋帳糧運を携帶する官兵の比にあらず。敗るれば林箒に四竄し、夜に至れば火をあげて嘯聚し、各方官軍を誤らしめて兼顧能はざらしめ、兵來れば賊已に去り、兵撤すれば、即ち賊そのうしろより來る。累重の兵を以て輕便の賊を討つ、盡きるなからん。』

矢野・前掲書第二二八頁・第二三四頁以降

二、當時の農民戦争の特性と失敗

太平天國以前の農民戦争は明らかに滿清政府の腐敗横暴の支配下に於いての、一種の滿清統治反對の闘争であつた。この種の戦争は、濃厚に宗教的色彩と原始的暴動の形式と云ふ特色を帯びてゐた。白蓮教になると、天理教、天地會なるとに論なく總て迷信を以つて團結群集し、暴動發生後は群集は極めて多數に發展して一種の掠奪的行爲とな

り、又その破壊をほしいままにして憤懣を注いだのである。これは當時の社會的背景の限界と農民の意識が落伍してゐることを反映してゐるのである。

當時の農民戦争は、極端に組織性の缺乏を表はしてゐる。各個の一揆の隊伍は元來極めてばら／＼であり、各個の一揆相互の間には何等の連絡もなく、加ふるに統一的指揮を缺いてゐた。それ故に『農民の散漫なることは、彼等が共同して共に事をなすを極めて困難にしてゐる』。同時に又明確な政治綱領がなく、いはゆる『反清復明』が僅かに一種の錯雜な闘争目標であつて、明確な具體的な、能く民衆を動員し闘争に参加せしむるに足る行動の綱領を缺いてゐたのである。これ等の弱點は總て當時中國に於いて、先進的階級と革命的政黨の指導關係が缺如してゐたことによるのである。又正に、これ等の特性の存在こそ滿清統治階級をして、容易に個別的な撃破の策略により、一揆を撲滅するを得せしめたのである。

かくして當時の農民戦争は、此れ起り、彼れ伏すといふ一起一伏の状態で五、六十年も續いたに拘らず、又戦争の區域は、南方と北方の廣大な各省に普及したにも拘らず、しかも結果に於いて總て失敗に歸したのであつた。

失敗の原因は、元來に存在する各種の弱點を除いた外に、猶客觀的に見て滿清政府の殘酷な鎮壓によつたものである。當時統治階級は正規の軍隊を出動せしめた外、更に豪紳地主の武装（郷勇、駐丁）を組織し、力を協せて農民の暴動を剿滅し、殘酷な殺戮の仕方を用ひて暴擧した農民に對したのであつた。例へば天地會に對する刑律の如く、初め『謀叛は未だ律を行はず』として後續いてこれを改め、即ち『斬絞』の刑を加へ、最後になつては更に首従を問はずして『すべて立斬』の刑を加ふるに至り、かくして白蓮教劉之協の事件は、胡宜に於いて連坐する者數千人に及ん

だのであつた。天理教の暴動に對しては即ち「教匪の殲除される外、良民の殺される者二萬餘人」(國史第十一冊)と言はれてゐる。

これ等の殺戮は農民戦争の興起する根本原因を解決することが出来ず、これのために、やがて踵を接して起つたのは更に廣汎且つ強力な農民戦争——即ち太平天國の亂であつた。

譯註

1、郷勇 これは今日も支那の各城市村落にみられる自衛團の起源をなすもので、度重なる匪亂に對して、自己の村落財産を防禦するため主として中農層を中心として農民自ら深溝を掘り、土砂を堆積して武装自衛したものである。然しこの郷勇自らが農民戦争の過程中これに加はり或ひは土匪化したことも少くない。したがつて、これが初めて各地に全般的に組織された白蓮教の亂中、已に當時陝甘總督たりし長麟は、これら郷勇を組織した民間の兵器没收、民設堡壘の破毀を上奏してゐる。即ち當時重起した各種の農民暴動に對して、この郷勇がいゆる自衛的武装によつて、統治者にとつて利益となつたことも事實であるが、又それ自身の性質によつて、統治者にとつては常に危険な反對物にも轉化しえたのである。

矢野・前掲書第二五二頁以下

稻葉「近代支那史」第三〇五・六頁

(四) 太平天國の興起と失敗

一、中國過去の週期的歴史の新しき再現

外國資本主義の地方生産に對する破壊により、又對外戦争賠償金の負擔によつて、舊税は一層重加され、その上新税も又増設され、農民は日毎に貧困を加へ堪へがたいまでになり、いよ／＼高利貸資本と商業資本の收取下に陥ち込んで、土地はますます地主の手中に集中して行つた。中國過去の歴史上に於いては凡そ二百年を週期として農業大凶荒があつたが(この種の凶荒は、完全に人為的收取の發展が作り出したところのものであるが)當時に至つて緊急な速度で以つてこの大凶荒が再現したのであつた。

一八四六年から一八五〇年に、全支那は不斷に大災害が爆發し被害區域は黃河流域の直隸・河南・山東・山西・陝西・甘肅・六省及び長江流域の湖南・湖北・安徽・江西・江蘇・浙江等の諸省を含み、被害の種類は旱魃・水害・風害・風砂・雹害・凶作等を包括してゐた。「まさにこの災害は非常なものであり、小民の慘苦の状態は、これを想像するだに忍びない」(道光朝東華續錄卷五十六)といふ有様となつた。廣西に於いては一八四九年に於いて食糧騰貴の恐慌が爆發し、飢民は倒産し流離し、依るべきところもなく「富者を奪ひ、貧民を救へ」の合言葉の下に千萬の飢饉に瀕した貧民が暴動に立上つたのである。

ここに於いて我々は又、中國の過去の歴史に於いて殆んど二百年を一週期とする農業大凶荒に必ず引續き作り出される政治的大恐慌即ち——農民の大蜂起に想到することが出来る。この時に於いては、又更に新しい形式を以つてこれが現れたのである。

もとより、この度の太平天國の擧兵を、過去の歴史上の農民戦争と一樣に看することは出来ない。問題は中國が既に鎖國自守の中國ではなくなつたと云ふことである。海邊の禁は已に開放されて居り、中國農民の敵は已に舊くからの收取者だけではなくて、新來の民族の敵をも持つことになり、その上中國社會は既に新しい變動を育みつゝあつた。この時に於いて農民戦争はあたかも有産階級の民主主義革命の序幕となつたのであり客觀的に見て正に、更に明確に、中國の資本主義の發展のために道を切り拓いたのである。

太平運動は阿片戦争後に於いて、先づ西洋資本主義と接觸してゐた南方に於いて爆發し（註一）英佛聯合軍の役を經過して、清朝の破廉恥の失權國辱は、この運動を更に澎湃として瀾漫せしむるに至つた。

一八五八年に、恩格斯はこの當時の事情を次の様に記してゐる。『動搖全く定まることなきアジア帝國は、一つ一つと歐洲人の利益慾の犠牲に成りつゝある。我々はこの事實の中に、次のことを看取する。即ちかくの如き一アジア帝國は、今や衰微を極め、破滅的な状態にあつて、遂にかの人民革命の危機を切抜ける力もないであらう。換言すれば武装蜂起の激烈な爆發はこの帝國內に於いては慢性的且つ明らかに癒し難い瘡疾に變じたのである。この帝國は既に腐敗の極に達し、決して如何なる地方に於いても本國民衆に對して外國の侵入に抵抗することを充分に約束し得ないのである。』と（露國の極東に於ける成功）。誠に然り、中國人民は、ヨーロッパ人の打撃を経て、今や既にその腐

敗堪へ難いまでになつた滿清朝廷が、到底自己民族の保護者となることの出来ないことを、そして又彼等は今や自救更生こそ緊急の道であることを覺悟し始めたのである。しかしこの太平運動こそ原始的な形式を用ひて表現した第一次の大規模な中國人民の民族自救更生運動であつたのである。

譯註

1、阿片戦争と廣東民衆の反英蜂起とが、廣東廣西の一般民衆に與へた影響は至大であつた。又廣東が早くより西歐宣教師のクリスト教傳道の根據地となつたと云ふことにも、廣東に太平天國の發祥地を見出すことの必然性が肯かれる。即ちヨーロッパ帝國主義とその宗教との來訪が折重なつて太平天國を支那の南方・廣東に育くんだ。

『この十年來支那に發生し、今や武力的革命に深刻化する痼疾的叛亂の、社會的原因が何であらうとも、又その結果いかなる種類の宗教的王朝的國家形態が採られようとも、その勃發の究極の原因は、支那に我々が阿片と呼ぶ麻醉劑を押しつけた英國のカノン砲が與へたものであることは疑問の餘地がない』「支那及び歐洲に於ける革命」。又、太平天國とクリスト教の意義は、

『支那の士大夫階級が儒家の學說によつてその搾取者たる地位と農民の尊信をつなぎとめてをり、その學說が「分」を以て中心としてゐるからには、士大夫の統治に反對せんとする者は、當然これと相反する何らかの教理に歸依することになる。かくして農民の會黨は常に異端視される』（陶希聖「支那封建社會史」邦譯・第九一頁）最後に、注目すべきことは、前出の如く英國による阿片の輸入激増が、支那よりの現銀の莫大な外流となつた結果、銀産の増加が政府財政にとつて焦眉の問題となり、かくして一八三〇年代より四川・雲南・廣東・廣西一帶の銀鑛の一齊開發が行はれ、これ

がこれら地方民衆（農民）の勞役收取となり、一般的に農業生産を破壊し、特に廣東・廣西の農民の不滿を刺戟して、太平天國の一因をなしたことである。（前掲「中國農民戰爭之史的研究」第二九一頁）。近代支那革命の基點、太平天國の南方起事の意義は右の如くして明かにされる。

二、太平軍の擧兵

太平天國は上帝會（註1）の形式を以つて組織された群集である。『朱九疇（註2）は上帝會を提唱し、明朝を恢復することを持つて誓志としてゐた。洪秀全と同郷の馮雲山は赴いて彼に師事した。九疇死し秀全は推されて教主となつた。——後、布教のために廣西に遊び、鵬化山に住まつた。』一八四四年洪秀全は廣西に入り、教學を名目として上帝會の組織活動をすすめた。一八五〇年に至つて上帝會の勢力は廣西に於いて極めて大きな發展を見た。一八五〇年に鵬隘山（桂平屬）の炭燒勞働者（註3）（上帝會群集）が官吏の強奪に反對して、直ちに金田（桂平屬）の暴動を惹き起した。一八五一年二月太平軍は大黃江に東出して（洪秀全はここに於いて太平王と稱す）後又引き返したが、再び平南に於いて清軍を撃ち破り、忽ち北出して永安州を占領し、太平天國を永安に建設した。（註4）ここで洪秀全は自ら天王と稱し、楊秀清を封じて東王とし、蕭朝貴を西王とし、馮雲山を南王とし、韋昌輝を北王とし、石達開を翼王とし、秦日綱、胡以冕を丞相軍師等の要職に夫々任じた。（註5）

一八五二年二月、太平軍は永安を棄てて北上し、清軍を大敗せしめて桂林に迫り、興安を出て全州を陥し、直ちに湖南に入り、道州・江華・寧遠・嘉禾・桂陽・柳州等の地を攻落して逸早く長沙に軍を進めた。長沙を圍攻すること

二ヶ月餘に亘つて猶ほこれを降すことが出來ず、遂に轉じて岳州を陥した。岳州を占領して後又長江を下り、漢陽・武昌を占領し、再び長江を下航し九江・安慶を占領した。一八五三年舊一月金陵南京を占領しここに國都を建設して天京と名付けた。

當時太平軍の銳鋒當るべからざるものあり、清軍はまことに風に靡くの概があつたのである。兵を進める途上に太平軍は陸續として『天を奉じ、惡を誅する』の檄を出し、又『世人を救済する』の檄（註6）又『天を奉じ胡敵を討つ』の檄文を發して群集を糾合したのである。この時に太平軍に加はつた群集は極めて多く、太平軍が湖南を出る時は同勢僅かに數萬人に過ぎなかつたものが、長江流域に至つた時は既に二百餘萬人を愈えると云ふ有様であつた。

太平軍が正に南京を攻略した時、滿清政府の反動武力はいはゆる江南大營と江北大營とに結集されて居り、これが金陵城の東の孝陵衛と揚州に分駐して、これに據つて太平軍に對抗したのであつた。

一八五五年、太平軍は揚州を攻略し、敵の江北大營を殲滅した。一八五六年江南大營は又太平軍によつて攻め陥されたが、この時滿清の統治は正に風前の燭と云ふに等しかつた。

太平軍は都を南京に定めて後（註7）軍事上にては更に擧兵北伐を續け、兵を二路に分ち林鳳翔と李開芳にそれぞれ統率せしめ進軍した。北伐軍は先づ江蘇省・鎮江・揚州等の地を占領し、再び臨淮より滁州に迫進して鳳陽を陥し河南に入り、黄河を渡り、山西に轉じて直隸に入つたが、そこで清軍に敗られて、ひるがへつて天津を襲つたがこれ又敗退し、止むなく退いて靜海・獨流鎮・楊柳清等の地域を守つた。後間もなく李李均が敵の擒となり、黄河北岸の北伐軍は總て全滅せしめられた。これは太平軍が軍事上に於いて最初に受けた重大な打撃である。

林李均の北伐出征後、太平天國は又胡以晃等を分遣して西に皖贛（譯註・安徽省・江西省）を攻めしめ、かくて長江の上流を爭取した。ここで胡軍は安徽に入り再び安慶を陥し、ここで兵を分つて南昌・九江を攻め、湖北に侵入し、再び漢陽・武昌を略取した。これに對して湘軍（註8）が兵を興したので、石達開は又これを大破して、三度武昌・漢陽を克服したのである。

この時、長江上流の重鎮は總て太平天國の手中に落ち、正に太平天國の全盛期であつた。

譯註

- 1、2、朱九疇は廣東狗頭山の民で、『道光中、上帝會を唱へ云々』の記事は「粵寇紀略」に見える。
 - 3、後出太平天國の軍事的最高指導者であつた東王・楊秀清はこの桂平近邊の炭焼労働者であつた。
 - 4、5、永安を占領した洪秀全の撥徒は、こゝで太平天國を建設し、咸豐元年十二月十五日（一八五一年）を太平天國元年正月元日と定め、洪自ら天王と稱した外、妻賴氏を皇后に冊立し、又「封郡臣詔書」を發して、東西南北翼その他の諸王を封命した。而して東王をして東方諸國、西王をして西方諸國、南王をして南方諸國、北王をして北方諸國を夫々管治せしめ、翼王をして天朝を扶翼せしめるとし、既に滅滿による天下統一のプログラムを上程してゐる。
- こゝでこれら太平天國の首導者達の出身階級を一瞥することは後出の諸問題の理解に無意義であるまい。即ち次の如くである。

天王洪秀全 廣東花縣の極貧農家の生れにして、數次の官吏試験の落第生

東王楊秀清 廣東の嘉應の炭焼労働者、極めて政治的革命的傾向つよく、一團のうちで、もつとも非宗教的戰闘的であ

つた。太平天國革命の初期より楊秀清は軍事的指導者として洪秀全の上であり、後出の多くの農民にアツピールした檄文も彼によつて發せられたものであり、特に南京建都後、洪が全く宗教的靜安の中に閉ぢこもつてしまつた後は、楊が全軍の軍政の指揮者となつた。したがつていはゆる「楊韋の戀」のために楊が洪・韋の嫉視の犠牲になつて後は、全革命運動は急速に頽勢に向つた。（後出「太平天國內部の衝突と瓦解」参照）

北王韋昌輝 桂平の富農の出身、「太平野史」によれば、科擧試験の試験官にもなり地方に聲望高き名家の出であつた。

南王馮雲山 廣東花縣の農民、「李秀成供狀」によれば才幹明白の士、又「太平野史」によれば書を讀み、大義を明かにし、星卜醫藥にも通じたとされる。

翼王石達開 廣西貴縣の人、富農出身にして、「李秀成供狀」によれば、四書五經に通じ、文武備足と稱された。

西王蕭朝貴 廣西武宜の貧農

以上については矢野・前掲書第十五章「髮賊亂の性質」特に第三四頁以下。

前掲「孫文傳」第七七頁

6、「奉天誅妖」「諭救世人」の檄、その他多くの檄は殆ど、永安占領の時、及び永安脱出後南京攻略迄の間に發せられ、この檄に應じて新に参加した農民は十萬に近かつたと云はれる。

右諸檄文の内容、及び永安——南京間檄に應じて參加した農民の地方別的増大數については、次を参照せよ。

稻葉君山「近世支那十講」「長髮賊」

矢野前掲書、第三一二頁以降。

7、南京は咸豐三年二月十日（一八五三年三月十九日）に太平天國の手中に陥ち、魏暉餘談によれば、咸豐三年六月南京城内・兩湖・兩湖・安徽及び各省人の男館（男子の軍營）にあるもの約五萬人、女館にあるもの約三萬人と稱された。

8、湘軍 後出の如く湘軍は、太平天國饑饉にもつとも功のあつた郷團の軍隊で、實に太平天國の大革命は滿洲八旗によらず、綠營軍によらず、この曾國藩の訓練統率した湘軍及び李鴻章の居軍などの漢人の郷勇軍がこれを鎮定したのである。

曾國藩は『そもく團練、郷勇は郷里を保衛する所以で、團自ら醸金して丁勇を養ひ、給を官に受けないから、緩急不時の用に供することが出来ない。これは如何にしても團丁を募つて官勇となし、その糧餉は官より給與することにすべし』との意見で奏請の上、湘郷（湖南）の羅・王等の召募した湘勇千人を基礎として勇營となし、明の戚繼光の成法によつて隊伍を編成し、厳格な兵技を訓練し、湘軍と稱した。（矢野・前掲書、第三六三・第三六六頁）

湘軍の反革命的基礎を、投機的インテリ、市井人におかず、農民においたのは曾國藩の慧眼であつた。

爲兵勇者、年輕力壯、樸實有農民之士氣者爲上。油頭滑面、有市井氣者、有衙門氣者、概不用。（湘軍營制）

三、太平天國內部の衝突と瓦解

太平軍が南京に進み、ここに駐屯して後は、安心安樂の怠惰な風潮が浸潤して來た。太平天國の領袖達はまた日に墮落腐敗して行つた。南京に建都して後は、當時の有利な情勢を利用もせず、主力を北伐に集中し、反つて享樂に安んじてゐたのである。當時の領袖は『今や江南に構踞して榮華に耽り、尊大を構へ、専ら名利にこれつとめた』（賊情彙報續卷六）

太平天國の各種の政策に對しては、まじめに實行することなく、早くも『禁令はすなはち徒らに科條を立て、軍務はすなはち全く告文にのみたより、氣脈は通ぜず、すでに麻痺して不仁の象となる』（同上）。領袖間に於いては則ち

『往時の互に頼り、心を打開くる股肱の同志は、今は則ち彼も此も離間して、猜忌の心は日に強くなつて行つた。』（同上）ここに於いて太平天國は即ち内訌を發生して、遂に楊韋の變（註1）となつて爆發したのである。

南京に建都して後、洪秀全は深く閉ぢ籠つて出ず、軍政事宜萬般は總て楊秀清が裁決することになつた。ここに於いて秀清は大權を掌中にして全朝を威壓し、秀全の猜疑を惹起したのである（註2）。一八五六年七月、秀全と韋昌輝は相謀つて秀清及びその全家族と徒黨とを殺してしまつた。石達開は安慶に於いてこれを聞き、急遽引返して昌輝に向ひ、謀殺の仕方が酷に過ぐるのを責めると、昌輝は又達開をも殺さうと企てるに至つたが、事が洩れて達開は夜に乗じて脱走した。ここに於いて昌輝は達開の全家族を慘殺したのである。達開は安慶に至り兵を集めて難を救はうとし、軍隊を進めて寧國に駐屯した。秀全は大いに驚いて昌輝を殺し達開に詫びた。達開が南京に入つて後、秀全は又達開に對して猜疑心を抱き、その兄（註3）を用ひて達開を壓迫しようとした。達開は迫害されて遂に南京を逃れ、別に一軍を形成して別個の發展を圖るに至り、これより太平天國は日く瓦解没落の道を歩み出したのである。

ここに於いて『翼王出京の後、東北王の殺されてより後、人心改變政事一ならず各々別心あり。主上は東・北・翼三王に弄ばされしと思ひ、未だ敢て外臣を信賴せず唯専ら同姓を信するのみ。當時人心は何れも解散の意ありて、しかも斷行せざりしが、そは、蓋し清將が、廣西人は捕殺して赦さずと聲言せるに由れるなるべし。若し清廷にして、早く廣西人を赦すとの聲言を宣せしめば、天京の解散せること、既に久しからん』（李秀成供狀）（註4）

後になつて起つた英王陳玉成と忠王李秀成（註5）は忠勇無雙にして雄才大略があり、戦へば常に敵を敗り、力を竭して太平天國の命運を挽回せんと企てたのであつたが時既におそく、折角の努力も結局無効に歸したのである。

1、2、「楊章の變」の根本原因は、楊章兩者の階級的食ひ違ひと、洪秀全自身の運動よりの後退に原因してゐる。
 「唯、惜むべきは、洪秀全南京建都後は早くも小成に安んじ、自からは天弟なる神の化身となり、衆目を避けて深居に閉居せり」(稻葉「近代支那史」第四二七頁)

「私は楊秀清が、髮賊の實際上の権力者たる地位に甘んぜず、名義上名譽上の地位に於ても洪秀全を凌いでその上に立たんとする様になつたことは、既に髮賊に於て宗教的精神がオブソリトになつた證據と考へる」(矢野博士、前掲書、第三五一頁及び第三三七―三四九頁参照)

3、洪秀全の二兄、安王洪仁發、福王洪仁達

4、矢野博士は長髮賊の亂に關する史料としては李秀成供狀が、ハンバークの洪秀全傳と共に大體信賴するに足るものとされ「李秀成は髮賊の亂の最初より既に之に加はり、後に洪秀全より忠王に封ぜられ、殆どその實際の首腦者となつたものであるが、南京が官軍のために陥落されし後捕虜となり、監禁中髮賊興亡の次第を叙述し毎日七千字づゝ親書して、十日程にして成つたものは即ちこの供狀であるとのことである。」としてゐる。又この供狀に對して「中國秘史の編者は文氣活潑、字體雄偉と評す」と附加されてゐる。

矢野・前掲書、第三三四頁。

5、忠王李秀成の出身に關しては、一八六四年十月二十二日の「華北報」に記載された李秀成自傳によれば、

「我家之清貧、促我離家之因。我家無可恃之物、生活艱難殊甚。自三八歲至二十歲曾入塾求學但此後我被迫於生活、不得不治農以助我父母。迨至我年二十、始知洪秀全有創設新教之計畫……」(中國近世史)

四、革命への反攻と太平軍の失敗

太平天國內部の衝突、無統制な享樂的な情勢の下に於いて、反動的な滿清政府は充分にその反動的武力を組織する餘裕を持ち、かくして今や革命勢力に對して反攻に出るに至つた。

太平天國の發展は滿清政府・地主・官僚・商人及び列強をして革命反對の共同戦線を結成するに至らしめ、彼等は一致して太平天國に反對し、多くの地方の反動武力を太平天國に對抗せしむる様再組織したのである。その中でも湘軍(譯註・前出、曾國藩の組織訓練せる湖南軍)淮軍(譯註・李鴻章の組織せる軍隊)が主力とされた。

一八五二年、曾國藩は湖南の巡撫張亮基の訓練したところの湖南の郷團兵(註1)を基礎とし、湘軍を長沙に編成した。一八五四年二月、湘軍は水陸長江に沿うて下り、東征の旗を進めたが、岳州と靖港とで太平軍のために敗られた。七月に至つて湘軍は始めて岳州を略し、武昌を恢復して九江に迫り、太平軍主力石達開軍と激戦し、太平軍のために撃破され、水軍は太平軍によつて鄱陽湖に封鎖された。太平軍は勝に乗じて三度武漢を攻略するに至り、湘軍も遂にここで危機に瀕したのである。

太平天國に對する反動武力の主力は湖南軍の外に又淮軍があり、その主導者は李鴻章であつた。後になつて太平軍が浙江方面に於いて勝利發展した時に(註2)、江蘇の豪紳連は援軍を求め(註3)、曾國藩はすなはち李鴻章をこれに派遣し、鴻章は淮軍を率ゐて上海に赴いた。この後淮軍は帝國主義の援助の下にあつて(註4)、東南に於いての反太平天國の最も有力な軍隊となり、東上の湘軍と東西相應して太平軍を夾撃するに至つた。

太平天國革命運動の發展は、同時に又列強に對する脅威となり、ここに於いて英佛米等の諸國はあたかも天津條約の締結の後にあつて、滿清政府と合作し、共同して革命に向ひ反攻の軍を進めた。まさに太平天國が淞滬附近（譯註・松江、上海）一帯を進攻した時に當つて蘇淞の道尹（譯註・官名——省長に隸屬する一道の行政長官）吳煦は義勇兵數千を募り、米人ワード（譯註・Ward）はその軍隊の教練と統率を請ひ、これを『常勝軍』（譯註・Ever-Victorious Army）と稱し、又『洋槍隊』と名付けたのである。ワード死後（譯註・ワードは浙江省慈谿に於ける戰鬥にて重傷し、間もなく陣歿した。——同治元年・一八六二年）は米人ブルヂヴィン（譯註・Burgwin）がこれに代り、最後にこの軍隊は英人ゴルドン（譯註・Gordon）によつて統率されることになつた。

一八六二年李鴻章が淮軍を率ゐて上海に到着した時、更に常勝軍の組織は擴大され、やがて常勝軍を以つて浙江・江蘇一帯の戰爭に参加せしめ、常に太平軍を撃ち破つたのである。後になつて李鴻章は松江城を恢復し、又常勝軍に完全な助力を得る様になつた。

時あたかも太平天國の内部が互ひに殺戮を重ねた内訌の時に當つて、反革命軍は革命勢力への本格的な反攻の段階に入つたのである。一八五六年十一月、曾國藩の湘軍は武昌を恢復し、清軍は漢陽を陥落した。

一八五八年四月、湘軍は九江を占領し、兩湖と江西は完全に湘軍の手に落ちた。この時太平軍は長江下流に於いて着々と勝利を重ねてゐたのに拘らず、總體の形成は既に後退と被壓迫の局面に落込んでゐたのである。一八六一年、湘軍は安慶を攻略した。太平軍の健將陳玉成は安慶を援けて失敗して後廬州に退いて守り、更に壽春に至つて敗れ、結局敵の捕虜となつて殺された。曾國藩は安慶攻略の後に於いて軍を三道に分つて太平軍を進攻し、曾國荃は金陵を

攻取し、左宗棠は全浙江を奪ひ、李鴻章は蘇淞を攻略した。

一八六二年——一八六四年、常勝軍と李鴻章軍は蘇州・常州を陥し、一八六四年左宗棠は杭州を陥し、江浙各郡縣は總て次第々に清軍の手中に歸して行つた。曾國藩の全軍は早く既に金陵城外を圍み、金陵を苦難に陥した。これより先、李秀成の軍は湘軍と數次に亘り激戦したが、總て奏効せず了つた。

首都南京が圍まれるに及び、城内は糧食久しく絶え、秀全は大勢利あらずと見て既に逃れ出て一八六四年末に遂に服毒して果てた（註5）。六月十八日地を掘つて地雷を爆發せしめ、湘軍は南京に突入した。當時城中には猶ほ太平軍十餘萬人居り、兩軍は遂に激しい市街戦を展開したが、この激戦にて太平軍十餘萬の兵隊は總て戦死し一兵一卒といへども投降する者がなかつた。かくて南京は遂に陥ち、李秀成は逃れ出たが、幾ばくもなくして亦郷間にて縛に就いた。（註6）

太平軍の別の一支軍たる康王・汪海洋の軍は杭州陥落後安徽に走つて江西省に入り、福建省の邊境に至り、忽ち又敗れて廣東省の嘉應州に入り、一八六五年に至つて清朝に滅ぼされた。太平軍の李世賢の軍は一八五六年に敗れて福建に入り、漳州に據つたが後又清軍のために討滅された。

北方の太平軍賴汝光・陳得才の兩軍は冀魯晉陝（譯註・河南、山東附近）の各地に轉戦して遂に滅亡せられた。西方の石達開は先に南京より出走して後安徽・江西・浙江・湖南・廣西の諸州に轉々逃れて後雲南省より四川に入り、大渡河に至り清軍によつて河邊で圍まれ、一八六三年南京の陥落以前に於いて既に清軍のために滅ぼされた。

南京陥落はまことに太平天國にとつて決定的な破滅となり、この時に至るまで十五年の長きに亘り轟々烈々の太平

譯註

- 1、第三章第二節譯註1
第四章第二節譯註8 參照

2、南京に太平天國を建都してより、洪秀全は進んで、沃地江浙地方就中上海をその掌中に握ることの重要性を認識しなかつた。したがつて南京建都の咸豐三年の九月、三合會の支流たる七首黨なる一撥隊が俄に起つて上海を占領し、この占領報告を南京の太平天國に致し、互に協同して一氣に革命を完遂せんことを要求した時、洪秀全は、これが叛黨の性質を調査せしめて三合會の分身と知つて協同戦線締結を拒絶した。このために遂に咸豐五年一月、一ヶ年半近くに亘つて農民軍によつて占領行政された上海は、外軍特に佛兵によつて撃退され、この時より佛軍は現在の上海バンド一帯の樞要地を居留地に獲得した。

この外國軍の七首黨攻撃の前、これを圍攻した上海の清軍は居留地内にて甚しい暴行沙汰に及んだので、英・米二國の軍民は反つて、黨匪に参加して、清軍に對抗した程であつた。このチャンスに洪秀全が掴みえなかつたのは太平天國の發展の上に決定的な誤謬であつた。後忠王李秀成が革命完成の上に江浙殊に上海占領のキイの重要性を認識し、これを進攻したのは既に咸豐十年であり、時既に、英佛米諸國の、買辦的江浙（上海）官紳ブルジョアジとの完全な妥協が成立した後であつた。

咸豐十年三月よりその冬にかけて李秀成の太平軍は一擧にして江浙地方を進略し、松江、蘇州、鎮江の要地を略し、太

倉・常熟・杭州を陥し、一八六〇年八月上海の西南青浦にて常勝軍ワードの軍を撃破して後直ちに上海縣城に向つたのである。

3、曾國藩に派遣せられた李鴻章の淮軍が上海に到着したのは一八六二年二月であるが、その時迄に李秀成は一度道尹吳煦の募つた英佛聯合軍によつて撃退され、一八六一年冬慕王譚紹光が江浙の民衆十萬を以て再度上海を襲つたが又、外國軍に撃退された。此時上海は、『太平軍の退却せしより、避難者益々多く商業は益々殷賑に赴けり……彼等（江蘇官紳階級・彼等は先に李秀成の上海進攻にあたり愛國會を組織し、資金を醸出して、多額の謝禮を約束して、歐米人の反革命参加を要求した。一八六〇年六月に組織されたワードの常勝軍即ちこれである）は遂に代表者錢鼎銘をば安慶なる曾國藩の大營に派遣し……同治元年（一八六二年）二月官紳等は銀十八萬兩を醸出して外國汽船十隻を雇ひ、再び安慶に遡江し、李鴻章の兵六千を載せて東下せり。一行は程學啓・郭松林の如き湘軍の名將を收めたるのみならず、新に淮勇とて安徽人によりて編成せられし新軍を統べ……云々。』

李鴻章は先に曾國藩によつて鎮江・上海いづれの地を守備すべきか決すべきを問はれた時、次の如く述べたと傳へられる。

「予は既に江蘇巡撫の任に就く、何ぞ滬中（上海）毎月二十萬餘餉の地を棄つるに忍びん。」と。

稻葉「近代支那史」第五〇一―一六頁
矢野「近代支那史」第四〇一頁以降

4、太平天國南京建都以來、この革命は歐米人の異常な注意をひいたが、殊に英米佛は太平天國の勢力と、この革命を指導した教義の性質を確める爲に續々と使節を天京に派遣した。英のボンハム、米のマーシャル、マクレイン、佛のド・ブル、ブロン等々がその主たるものであつたが、彼等の觀察によつてその本國政府に報告したものと、要旨は大體に

於ていづれも局外中立を守るべきであると云ふ意見であつた。

併し列強の眞の關心は上海を中心とする揚子江沿岸の通商の利害にあつた。それ故に太平軍北上のはじめ上海に於ける各國領事館は中立を守ること一決したが、萬一に備へて義勇兵を募つたり陸戦隊を上陸せしめたりして警戒した。然るに一度び、太平軍李忠王軍が江浙地方に侵入し上海を脅すや、忽ち英佛軍を中心とした外國勢力は清兵を援助して太平軍を攻撃し、こゝに常勝軍の積極的攻勢及び海軍の協同戦線となつて表れた。これは英佛ブルジョア資本の太平天國そのものの革命的本質との矛盾及び、英佛帝國主義の支那半殖民地化要求と江浙官紳資本の買辦化との抱合成立の二つの基本的理由がもたらすものであらう。

東亞經濟調査局「支那ソヴェート運動の研究」第四九頁以下。

稻葉「近代支那史」第四三八・九頁（英全權大使サー・ジー・ボンハムの意見）

5・6、洪秀全自殺後、南京陥落の時、李秀成は、洪秀全の一子洪福瑱を連れて逃亡し、李は幾何もなく南京城北湖西村と云ふところで就縛し、福瑱は江西・浙江地方を逃げ廻つて同治三年九月二十五日石城縣荒谷で捕へられ、南昌で磔刑に處された。

（五）太平天國の制度と政策

一、太平天國の階級性と民族性

太平天國は民族的ブルジョアの農民戦争である（註1）。革命運動に参加した基本的群集は農民であつたが、指導者達は知識分子即ち洪秀全・馮雲山等であつた。然し又富農分子たる韋昌輝・石達開・胡以晃等の参加もあつた（註2）。『李秀成供狀』には次の様に書かれてゐる。『天主（譯註・洪秀全）は常に深山にをり、密に世人に上帝を敬拜すべきことを説いた。聽く者十家の中或ひは三五家これに従ひ、或ひは十家の中八家これに肯く。又讀書知識の士はこれに従はず、従ふ者はすべて農夫の家・窮苦の家であり、かくして次第に積み重なつて群集を結成した。』後に至り太平軍が長江流域等の地に進入した時太平軍に参加した廣大な群集も又、天災人禍に因つて飢ゑ凍えた流離の農民であつた。別に又當時の安徽省の情勢を記載した文書によれば『安徽省は賊匪が、凶年に糧食も盡きたので飢民數十萬を脅かし黄梅……等より雪崩の如く游動す云々』とある。（賊情彙纂より）

太平天國の能く十五年の長きに亘りその生命を維持し得た所以は、又廣大な農民が不斷に鬭争に参加したことにある。太平天國の制度と政策も即ちこの農民階級の要求の反映であつた。

太平天國は滿洲族の壓迫に反對し、漢民族の獨立解放を爭取せんとする民族的農民戦争である。このことは『奉天

討胡』の檄の中に於いてはつきりと看取することが出来る。

即ち『嗟、爾、有衆明かに予が言を聽け、予惟ふに、天下は上帝の天下にして、胡虜の天下に非ず、衣食は上帝の衣食にして、胡虜の衣食に非ず、子女人民は、上帝の子女人民にして、胡虜の子女人民に非ず、概す、滿洲の毒を肆にして、中國を混亂せしより、六合の大、九州の衆を以て、一に其胡行に任せ、恬として怪むを爲さず、中國尙ほ人ありと爲す乎。妖胡虐焰、蒼穹を燐き、淫毒宸極を穢す、醒風は、四海に播し、妖氣は五胡よりも慘たり、而も中國の反つて低首下心、甘じて婢僕となる、甚しいかな、中國の人なきや。それ中國は首なり、胡虜は足なり、中國は神州なり、胡虜は妖人なり、中國名けて、神州となすは何ぞや、天父皇上帝は眞人なり、天地山海は、是其造成するところ、故に従前神州を以て中國に名けたり。胡虜を目して、妖人となすは、何ぞや。閻羅族は邪鬼なり、韃靼の妖胡は、惟だ敬拜す、故に當今妖人を以て胡虜を目せり、奈何ぞ、足は反りて首に加へ、妖人は反りて神州を盗み、我中國を驅りて悉く妖魔に變ぜしむるや、南山の竹筒を罄くすも、滿地の淫汚を寫し盡さず、東海の波濤を洗するも、彌天の孽罪を洗淨せず、予謹みて略ぼ其彰著なるをいはん。夫れ中國には、中國の形像あり、今滿洲悉く削髮して禽獸となすなり。中國は中國の衣冠あり、今、滿洲別に胡衣猴冠を頂戴して先代の服冕を壞る、是れ中國の人をして其の根本を忘れしむるなり。中國には、中國の人倫あり、前に僞妖康熙暗に韃子一人をして十家を管し、中國の女子を淫亂せしむ、是れ中國の人をして盡く胡種たらしむるなり。中國には、中國の配偶あり、今、滿洲妖魔、悉く中國の美姫を收めて奴となし、妾となし三千の粉黛皆な羯狗に汚せられ、百萬の紅顏竟に騷狐と同寢す、之を言へば心を慟かしめ、之れを談すれば舌を汚す、是れ中國の女子を盡くして是を玷辱するなり。中國には、中國の制度あり、今、滿

洲妖魔の條律を造爲し、我中國人をして、能く其網羅を脱するなく、其手足を措くところ無からしむ、是れ中國の男兒を盡くして、之れを脅制するなり。中國には、中國の言語あり、今滿洲、京腔を造爲して中國の音に更ふ、是れ胡言胡語を以て中國を惑はすなり。凡そ水旱あれど、憐恤せず其饑孳を坐視し、流離暴露、莽の如し、是れ我が中國の人の稀少ならんことを欲するなり。滿洲は又貪官汚吏を縱ちて天下に布滿せしめ、民の脂膏を剝りて、士女皆な道路に哭泣す、是れ我が中國人の貧窮ならんことを欲するなり。官は賄を以つて得、刑は錢を以て免れ、富兒權に當り豪傑望を絶つ、是れ我が中國の英俊をして抑鬱して、死せしむるなり。凡そ英雄の天に代りて仇を報するあれば、動もすれば、誣ふるに謀反大逆を以てし、其九族を夷す、是れ我が中國英雄の志を絶たんと欲するなり。滿洲の中國を愚弄し、中國を欺侮する所以のもの、その極を用ひざるところ無し、巧みなる哉。昔姚戈仲は、胡種なり、猶ほ其子襄を戒めて、中國に歸義せしむ。符融亦た胡種なり、毎に其兄堅を勸めて中國を攻めざらしむ。今、滿洲乃ち其根源の醜賤を忘れ、吳三桂の招引に乗じ、中國を霸占し、惡窮凶を極む。予、滿韃子の始末を細査するに、其祖宗は、乃ち白狐と赤狗の交媾して精を成し、遂に妖人を産したるもの、種類日に滋く、自ら相配合し、並びに人倫の風化なし。中國の人なきに乗じ、中夏に盜據し、妖座の設、野狐升據し、蛇窩の丙、沐猴にして冠す。我中國其窟を犖き、而して其穴を鋤くこと能はず、反りて其詭謀に中てられ、其凌辱を受け、其の嚇詐に聽かず、甚しきは庸惡陋劣、蠅頸を貪圖して狐狗群黨の中に拜跪す。今、三尺の童子あり、至りて無知なり、犬豕を指して之れを拜せしむれば、則ち艱然として怒る。今、胡虜は、猶ほ犬豕の如し、公等讀書古を知り、毫も羞を知らず、昔、文天祥・謝枋得は、死を誓ひ、元に事へず、史可法・瞿式耜は死を誓ひ、胡に事へず、此れ皆諸弟の熟聞するところならん。予總料するに滿洲

の衆は、十數萬に過ぎず、而して我中國の衆五千餘萬を下らず、五千餘萬の衆を以つて、制を十萬に受く、亦孔はなは醜くし、今幸に天道還るを好み、中國は永興の兆あり、人心治を思ふ、胡虜必滅の徵あり、三七の妖運終りを告げ、而して九五の眞人已に出づ、胡罪貫盈、皇天震怒し、我が天主に命じ肅みて天威をとつて義旗を創建し、妖孽を掃除し、中國を介安し、恭しく天罰を行はしむ。遠きに言へ、邇きに言へ、孰れか左祖の心なからん。或は官となり、民となる、當さに揚徽の志を急にすべく、甲冑干戈、義聲を載せて色を生じ、夫婦男女、公憤を攄べて、以つて前驅し、誓ひて八旗を屠りて九有を安じ、特に四方の英俊を召して、速に上席を拜し、以て天衷を獎まし、守緒を蔡州に執り、妥懼を應昌に擒にし、久淪の境土を興創し上帝の綱常を項起すべし、それよく狗彘子の咸豊を擒にして來り獻するものあらん、或は能く其首級を斬りて來りて投ずるものあらん、或は又能く一切滿洲胡人の頭目を擒斬するものあらん、太官に奏封するは、決して食言せず。蓋し、皇上帝當初六日に造成するの天下、今既に皇上帝の大恩を開くを蒙り、我が主天王に命じて之れを治めしむ、豈に胡虜の得て久しく亂るところならんや。公等世々中國に居る、誰れか上帝の子女に非る、倘し能く天を奉じて妖を誅し、螿弧を執りて以つて先登し、防風の後れ到るを戒む、世にあれば、英雄比なく、天にあらば榮耀疆りなし、若し或は執迷悟らず、僞に従ひ眞を拒まば、生れて胡人となり、死して胡鬼とならん。順逆大體あり、夏夷定名あり、各宜しく天に順ひ、思を脱して人となるべし、弟等滿洲の禍を苦しむや久し、今に到りて、猶ほ變計を知らず、同心戮力、胡塵を掃盪せずんば、それ何を以つて上帝に對せんや、予の義兵を興すは、上、上帝の爲めに、瞞天の讎を報ひ、天國の爲めに下首の苦を解き、務めて胡氣を肅靖し、同じく太平の樂を享けんとすればなり。天に順ふるものは、厚福あり、天に逆ふるものは、顯戮あり。天下に布告して、咸な

聞知せしむ。(註)

この一檄文より太平軍の行動に及ぶまで、總て太平天國は一種の農民戦争であることを説明してゐるけれども、當時の外國勢力の侵入によつて更に、中國人民の滿洲族の壓迫に反抗しようとする覺醒が促進され、而して更に新たななる民族危機の到來が既述の如く既に前面に迫るに及び、いよいよ中國人民を覺醒して、先づ何よりも滿清の壓迫を覆がへし、かくすることによつて民族の自救を謀らんことを要求せしむるに到つたのである。この様に、この一農民戦争は濃厚な民族的色彩を帯ぶるに到つた。而して又太平天國が民族的色彩を帯びてゐたそのことが、この種の運動をして一層廣汎なものたらしめたのである。

譯註

1、『伐暴救民』の に次の如くある。

「かくて、富者と強者とは、その匪行何等罰せられるところなきに、貧者賤者に至りては、その罪禍を救済するに何等の方法を見出すこと能はず、説き來れば實に人の毛髮を豎立せしむるのみ。就中地租の強請は、近來に至りて甚し、一時三十年滯納を免ぜんとするの噂ありしかど俄然一變し、今や人民の資財を盡せしめざらんば已まざらんとす。吾人豈にこれら眼前の不幸を雲烟に附することを得んや。今日に處するの途は、必ずこれら各地の虎狼を根柢より驅逐する一法あるのみ。吾人は、今軍を進むるに際し、彼の善良なる農夫・職人・商人は尙平和に各々其職業に従ふことを得るを保證す。されど富者は、吾人の軍隊の糧食を支持せんがため、その貯蓄を出すべく、その出資の多寡によりて、他日償還の受領書を交附すべし、又賢者あらば出で來りて、吾人の行動に乗じ、地方の匪徒の暴動を企つるあらば、直ちに吾人

に報告するところあるべし、吾人は兵を出して勦滅せん。』(リンドリー「太平天國」)

稻葉「近代支那史」第四五六頁以降。

2、第四章第二節註4・5参照

3、本稿に引用されてある「奉天對胡」の概は原文にて若干の省略あるも、特に稻葉氏「近代支那史」第四一九頁以下より全文を抜萃して参考にした。

二、太平天國の原始共產主義ユートピア

當時の廣大な農民生活の悲惨は、農民を刺激して遂に當時の統治に對する不満と反抗に赴かしたのみでなく、その上又農民をして一つの新しい社會を幻想せしめ、或ひは又原始農村共產體時代の制度の恢復と云ふ幻想を懐かしめたのである。この種の幻想は即ち、太平天國の唱號する社會制度であつた。太平天國が理想とする社會は、一種の原始的共產主義ユートピアであり、このユートピアの單位とする設計圖畫は次の様であつた。

即ち、二十五家を以つて一農村共同體の單位とし「凡そ二十五家中國庫一、禮拜堂一を設け、兩司馬(譯註・古代の軍旅の事を司る官名より出づ)之に居る」この一共同體内にあつて「田あれば共に耕し、飯あれば共に食し、衣あれば共に穿ち、錢あれば共に用ふ」。國庫は村中の公産機關である。農民の餘剰の農産品は國庫に上納して保存せねばならぬ。「およそ收穫成るの時兩司馬、伍長を督し、二十五家の每人食するに足る糧食を除いた新穀の餘りは即ち總て國庫に歸す」(註1)。この外「およそ二十五家中木石等を陶冶する職人はともに伍長及び伍卒を用ひこれを爲し、農閑

に事を治む」この社會内にあつては婚姻を賣買することはない。「およそ天下に、婚姻は財を論ぜず」同時に「婚娶吉期等のこと、總ては天父上主皇上帝に祭告し、一切の舊時の歪例はこれを除く」。教育方面に於いては即ち「童子はともに毎日禮拜堂に至り、兩司馬は「舊遺詔聖書」「新遺詔聖書」及び「眞命詔旨書」を教讀すべし」毎禮拜日は「禮拜堂に至り、男行女行を分別し道理を聽講す」(以上は總て「天朝田畝制度」に據る、)(譯註・「天朝田畝制度」は太平天國三年(一八五三年)に頒行された)

この種の理想社會は先づ太平軍の軍制上に試用された。これによつて太平軍は一方面では軍事組織であると共に、同時に又一種の臣衆組織と行政組織であると云へる。軍隊中には聖庫が設けられた。洪秀全の下した詔令によれば「兵將皆すべて、妖を殺し、城を攻めて取得する一切の金寶・綢帛・寶物等のもの、これを私藏することを得ず、盡く天朝の聖庫に納歸すべし。官長も又俸給なし。王侯となると雖も、決して常俸なく食肉に制あり」更に「諸匠營及び各典官を立て、百工技藝も各々歸するところあらしめ、各々その職役を効はしむ」(註2)(賊情彙纂より)當然この種の理想的社會制度は、軍隊中に於いて多少は實行された以外には實行することなく、又實行不能のものであつた。

この種の理想社會は濃厚に宗教的色彩を帯びてゐる。即ち「天下皆上主皇上帝一家である。……これすなはち天父上主皇上帝が太平眞主に特令せる世の旨意也」これに因つて更に禮拜堂を設け、禮拜を行ひ「天父上主皇上帝を讃へこれを祭るべし」(天朝田畝制度)而して太平軍の赴くところでは何處でも即ち「銅鑼を鳴し、兵衆或ひは百姓を集め、何日何時何處で道理を聽講するかを傳ふ」この種の理想社會はもとより農民の過去の農村共同體への追憶を反映

してはゐるが、然し新宗教の色彩と民主思想の浸透は、むしろ外國資本主義の中國に侵入せる影響と見なさねばならぬであらう。

譯註

1、「凡天下樹牆下以桑、凡婦蠶織縫衣裳、凡天下每家五母蠶、二母蠶、無失其時。凡當收成時、兩司馬督伍長除足其二十五家每人所食、可接新穀外、餘則歸國庫。凡麥、豆、苧麻、布帛、雞、犬各物及銀錢亦然」(天朝田畝制度)

「凡二十五家力農者有賞、惰農者有罰」

前掲「中國農民戰爭之史的研究」第三一五・六頁

2、匠營 太平軍南京占領後八軍(一軍は一萬三千五十六人)を以て、土營・木營・金匠營・金靴營・織營・繡錦營・鐃營等の生産技術的な匠營を組織し、天侯以下一切の需要はこれによつて供給すると云ふ一種の社會化された軍事共産的生產制度を實行した。

前掲「孫文傳」第七七頁

三、太平天國の政策

太平天國は各方面に於いて、多かれ少かれ上述のユートピア共産主義の色彩を帯びてゐる。土地問題の上に於いて太平天國は曾て「天朝田畝制度」を頒布し(譯註・太平天國三年頒行)土地私有制度を廢除し土地國有を實行し、舊に

餘剰の農産品は必ず國庫に上付すべきのみでなく、同時に人民が受領した田は亦、個人的な私業とするを許さず「凡そ天下の田は、天下の人共同に耕し、此處に不足あらば則ち彼處に遷し、彼處に不足あらば則ち此處に遷す。凡そ天下の田、豊荒相通ぜしめ、則ち此處荒なれば則ち彼の豊處に移し……田あらば共に耕さしめ……不均等をなくし、耕暖せざる人なからしむ」(註一)

土地分配上に於いては、土地を九等分し、上上田・上中田・上下田・中上田・中中田・中下田・下上田・下中田・下下田とする。人口と勞働力とを加重混合してこれを土地分解の原則とした。

「男女を問はず、其家族の人數の多寡を數へ、人多ければ則ち分多く、人寡ければ則ち分寡し」「凡そ十六歳以上は男女一人毎に田を受け、十五歳以下はその半ばにし、もし十六歳以上、上上田一畝を分かてば、則ち十五歳以下はその半ばに減じ、上上田五分を分つ」土地分配の時は「九等の地を混じて、もし一家六人居り、内三人が好田を分かてば、三人は醜田を分ち、好醜各々半ばす」となした。(天朝田畝制度)

この種の土地政策は土地を徹底的に平分する辦法であり、當時の農民の切迫した要求の反映である。然し當時戰時的環境の影響、及び土地政策を實行する堅い決心を缺いた爲めに、土地政策をして一般的に言へば總て實行せしめずなり、たとへば蘇州の百姓の如きは、普通に地租を納むべく、亦田畝も勝手な收納を許して深く追究せざるに至り、(李秀成供狀)「照舊規投誠捐糧」と云ふ實狀にあつた。(青巖遇寇錄)

太平天國の工商業政策に至つては、そのユートピア的共産主義に根據するものではあるが「商賈の資本は皆天父の有するところ、總て國庫に解歸すべし」と宣布し、軍隊中に於いては又「諸匠營」を組織したが、この政策も然し實際

上は執行する法のないものであつた。因つて工商業政策に於いては又猶ほ舊い状態を維持したのである。故に當時の一英人リンドリー（譯註・F. Lindley: "Ti-Pin Tien Kwok" 太平天國の著者）はこれ等の様子を描寫して次の様に言つてゐる。『余等たまく重載の一貨船に遇つた。これを些細に觀察すると、現銀を満載してゐる。余怪んで匪徒しきりに出現せるにどうしてこれを能く運び得るやと問うた。則ち答へて言ふ。およそ「太平」をそしめる者は皆たぶらかすものである。……人、太平軍を誘ふところ亂脈と云ひ劫掠と云ふ。然るに太平軍は亂脈を事とせず。故に境中尙ほ絲を産し、又人々は尙ほ敢へて現銀を運び入境するものである。』『地上海を距ること約六十英里にして帆檣雲集、絲船特に夥しく、町擾さず、市驚かず』（太平天國外記）

財政政策上に於いては一面舊い錢糧の徴收に依り、一面則ち募税と土豪からの徴税を實行した。但し民衆に對しては則ち『些かも擾すなし』『太平軍は長沙を経て武漢を陥せる時、兵皆な糧食を缺き、偶々劫掠し、其名を美はしくして没入（譯註・沒收）と稱す。然れども必ず貴官富紳を選びて之を行ひ、民間は即ち毫もこれを掠むることなし。つねに衣物を攫取してこれを貧者に頒け與へ、又特に治平をもたらすべしと誓ひ、概ね租税三年を免す、郷民之を徳とす』（太平天國野史）

太平天國の對外政策は、その開始の時に於いて或程度は外國と友好關係を保持し、外人の自由通商を許した。『天王は乃ち使を遣して各外船の船長を招き、而して共に各營（譯註・匠營）を歴覽し且つ曰く、彼我通商し、然るべきところに理辨せよ。將來事を定めるには、只だ洋烟（阿片煙草）のみは再び吾が中國に來るを許されざるも、その他に於いては自由に貿易し禁止するところなし。……後これらの船長が上海に歸るに及び、天王は弟洪仁玕を同行せしめ

て招きに應じ、英米佛各領事と會見せしむ』（清季野史）而して列強が中國に侵略して來る過程に於いて滿清政府と衝突を惹起したが（譯註・上述阿片戰爭その他）このことは外國をしてその初め太平天國に對して中立の態度を採らしめた。然し間もなく天津條約の締結に到つて後は、列強は滿清政府の手中より奪つた各種の利權を保持し實現し、更に擴大せんとし、その上太平天國の勢力が勝利發展することは、結果に於いて外國資本主義の在華の特權を破壊するに至るに鑑みて、彼等は忽ち滿清政府と妥協聯合して一氣に太平天國に向つて進攻して來たのである。

最後に太平天國は男女の平等を確立し、買賣結婚を禁止し、蓄婢納妾を禁止し、纏足を禁止し、奴隸制度を廢除し、暗黒な刑法制度を廢除し、阿片を禁絶する等、すべて、これ等は有意義な民主主義思想の表現ならざるはなかつた。（註2）

太平天國の政策は特別に土地政策に重點があり、太平天國は簡單に過去と一様の農民戰爭に非ずと説明されるが、これこそ正に近代ブルジョア階級的民主革命の序幕としての農民戰爭なのであつた。太平天國の政策中には少なからざる民主主義思想が含まれて居り、特に土地平分の思想がこれである。この種の思想は太平天國の指導者達の主觀に於いてはユートピア的共產主義であるが、客觀的にみればこれこそ資本主義の廣大な發展の要求なのであつた。即ちこの一思想の内部には地主の土地を沒收し、封建勢力を肅清するといふ内容が包含されて居り、これに因つて廣大な農民戰爭を惹起し、資本主義發展の趨勢に、自ら代つて道を清めることを可能にしたのである。もとより太平天國はブルジョア階級の民主革命ではない。基本的に見て猶ほ農民戰爭である。けれどもそれと過去の原始的農民戰爭との間には幾多不同の點があるのである。その不同は當にそれが地域的に見て中國の各主要な地域に廣く波及したと云ふ

だけに止まらず、又ただに運動が本来最も廣大な民衆を参加吸収し得たと云ふことに因るだけでなく、それは他の從來の農民戦争に比較して明確な主張を持ち、嚴重な組織を持ち（註3）更に進歩した各種の政策を把持してゐたと云ふことに於いて、即ち太平天國運動がブルジョア民主主義的特質をもてるものと言はれるのである。これ等の以前の農民戦争に對する不同は、實に太平天國が以つて置かれたところの時代的不同的もたらすところであらう。

譯註

- 1、「其天下由天下人同耕、此處不足則遷彼處」「凡天下豊荒相遷、此處荒則移彼豊處、以賑此荒處、務使天下共享天父上主皇帝大福。有田同飽、有飯同吃、有衣同穿、有錢同使、無處不均勻、無人_レ不耕_レ爰也。」（天朝田畝制度）
前掲「農民戦争之史的研究」第三一五頁
- 2、太平天國に於ける女子の解放については種々興味ある記録が残されてゐるが、その原始共產制的土地配分にも女子を男子と平等の地位におき、軍事的編成の中にも女子を重要視した。即ち軍隊の中に女營を設け、又南京に於ては男館に對して女館を設け、南京建都まで男女兩營の交通は嚴禁せられた。南京に於ては男館前後左右中の五軍十二萬、女館は八ヶ軍十三萬と稱された。（天朝田畝制度・太平天國野史）
稻葉「近代支那史」第四三〇頁
東亞經濟調査局、前掲書、第三四頁
- 3、永安陥落の四ヶ月前、廣西の知事某の書翰に次の如くある。「叛徒は次第に増加して來た。吾我の軍隊は戦へば戦ふ程怖れを抱くに對し、叛徒は概して力強く烈しく、尙且つ其法規と軍規は嚴格で明瞭で、如何にしても烏合の衆とは見

做されぬのである』かくしてヴィクトリア僧正をして次の如く讚嘆せしめた。「豊饒の地、人烟繁き處、千五百哩も續いた其長い列を通じて、劫掠、殺人、強奪、苟も亞細亞諸國の戦争中にあり勝ちな亂暴をするものは摘發されて死刑に處せられたので、かの清教徒が嚴格よりも更にきびしく、彼等は同胞が好尙した肉慾とも戦つた。かの十戒の道德上の規則は強行せられ、かてて加へて更に嚴しい解釋がこれにあてはめられた。春情の萌發、淫濫な歌謠、亂行を促す様な一切の刺戟物は禁ぜられ、飲酒、喫煙、賭博、虚偽、惡口、殊に阿片を喫しての放縱は、德行上少しも許されぬものとして斷然排除されたのである』

F. Lindley: "Ti-Pin Tien Kwok" (稻葉「近世支那十講・長髮賊」)
定營規條十要 一、要_三格_二遵_一天_レ令。二、要_下熟_二識_一天_レ條_レ讚_レ美。朝晚禮拜。感_中謝_レ規_レ矩_レ及_レ所_レ頒_レ行_レ詔_レ諭_上。三、要_下練_二好_レ心_レ腸。不_レ得_二吹_レ烟_レ飲_レ酒。公_レ正_レ和_レ平。母_レ得_二包_レ弊_レ徇_レ情_レ順_レ下_レ逆_レ上。四、要_下同_レ心_レ合_レ力。各_レ遵_二有_レ司_レ約_レ束。不_レ得_下隱_二藏_レ兵_レ數_一及_レ匿_中金_レ銀_レ器_レ飾_上。五、要_下別_二男_レ營_レ女_レ營。不_レ得_二授_レ受_レ相_レ親。六、要_三諳_二熟_一日_レ夜_レ點_レ兵。鳴_レ鑼。吹_レ角。搥_レ鼓_レ號_レ令。七、要_下無_レ幹_レ不_レ得_下過_レ營_レ越_レ軍。荒_レ悞_レ公_レ事。八、要_三學_二習_一爲_レ官_レ稱_レ呼_レ問_レ答_レ禮_レ制。九、要_下各_レ整_二軍_レ裝_レ鎗_レ礮。以_レ備_中急_レ用_上。十、要_レ不_レ許_下詭_二言_レ國_レ法_レ王_レ章。詛_中傳_レ軍_レ機_レ將_レ令_上。（金陵兵事彙略）
矢野「近代支那史」第二五六頁

(六) 太平天國失敗の教訓

五八

十五年の長きを堅持した太平天國革命運動も終に失敗に了つた。その失敗の原因はおよそ次の如きものである。

第一。基本的原因は、當時の歴史條件の制限の致す所である。阿片戦争後、中國は半封建的半殖民地的社會に轉化し始めたが、同時に又資本主義の種子を醗酵したのであつた。然し當時は猶ほ新興資産階級と無産階級とを缺如して居り、又一個の資産階級或ひは無産階級の政黨を組織し形成して太平天國を領導する可能性を缺いてゐた。而して農民はすなはち基本的にはまだ落後的・保守的・散漫的・無組織的であつて、農民戦争が勝利を取得するのは資産階級（例へば過去のフランスの如く）或ひは無産階級（例へば露國の如く）の指導の下にあつてこそ初めて可能なことなのである。

而して農民が徹底的な解放を取得せんとすれば、それは唯だ無産階級の指導下に於いてのみ初めて能く到達し得る事である。當時の歴史的條件の制約は、太平天國に何等か一個の革命的階級と政黨の指導を與へず、かくてこれは結局失敗に向つたのであつた。この失敗の基本原因より出發して、又太平天國をして爾餘の多くの錯誤を生ましめたのである。

第二。何等か一個の革命階級と政黨の指導なきために、太平天國は充分に當時のあらゆる農民運動を團結し、糾合し、統一することが不可能であつた。當時中國の各地には農民運動が到る處風雲起湧の有様で勃發し、中でも特に北

方の捻子の鬪争と南方三合會の運動の發展は著しいものがあつたが、太平天國は、總て一步を進めてこれ等の革命運動を團結し、革命の力量を増強し、以つて反動の統治を破ることが出來ず、反つて敵に各個別的な撃破の機會を提供してしまつた。（註一）

第三。戰略上の錯誤としては、全力を集中して進んで敵の最後の堡壘——即ち北京を攻略しなかつたことである。敵が慘敗の際に乗じて迅速に敵を殲滅することなく（當時僅かに兵力薄弱なる一個の支隊を北伐に派出したに止り、結果は敗北を喫した）反つて南京を保守して、敵をして能く反革命の力量を整理し組織せしめて、革命に對する反攻に出ることを可能にしたのである。同時に又兵力を分散し、兵力を疲勞せしむる錯誤を犯し、自己をして常に被動の地位に立たしめることになつた。特に後半期の戦争に於いては、太平軍は多く被動的防禦戦を採り、東援西救南奔北走の戦局を作り出し、常に不利の條件の下に立ち、正に退却すべき時に、また適當な退却を組織し得なかつたのである。

當時の名將李秀成は、曾て度々退却を主張したが、例へば「京師危急にして坐斃は策に非ず、もし湖北江西を親征し、上游を制握して以つて天下に號令し、蘇州を襟帶し以つて富源を益せざれば、即ち金陵をして失はしめ、猶ほ兵五六十萬を擁し、中原を驅するに足るも、もし此危城に戀著して征調に至らずば必ず滅亡の道のみ」と云ひ、又「京都斷じて久持しがたし。臣既に智力窮盡し謀を思ふことなく、たゞつとめて親征を請ふのみ……危城を守るは譬へば籠中に居るが如く、以つて食絶を待てば萬事不可なり」（以上、羅惇勳、太平天國戰紀）と進言した。然るに洪秀全は却つてこれを顧ることなく、結果に於いて南京を死守し、敵のために撲滅せしめられたのである。

第四。更に明確に群集を組織し、群集を武装し、民衆の闘争は特に土地闘争であることを認識して、これに深く立入ることが充分に出来なかつた。又眞に強固な且つ有力な政權を確立し、多くの更に鞏固な革命根據地を創造することを充分考慮せずして、一種の單純な軍事行動を形成したに止まつてしまつた。その結果は許多の通都重鎮を占領したにも拘らず、鞏固に起上ることが出来ず、得るにつれて又失ふの現象を作り出し、流動的な活動を形成するに止まつたのである。

第五。太平天國の指導者の内部の不團結は相互に猜疑し相互に殺害を重ねた。指導者内部の團結が、全體の革命運動指導の核心を形成するに充分であり得なかつた。

金陵に奠都して後には、すなはち日に益々民衆を脱離し、遂に漸次元來の面目を失ひ、繼續して民衆の利益のために奮闘すると云ふ共同の目標下に緊密な團結を起すことが出来なかつた。反つて聲色玉帛のために迷つて墮落腐化に走り、まつしぐらに自滅の運命を進んだのである。而して石達開の師を率ゐて西行せることは（しかもその大部分は太平軍の精銳であつた）更に太平軍の失敗に影響したのである。

最後に、客觀的にみれば、當時の統治階級たる地主・官僚・貴族・商人等の一條の反革命陣線が結成され、一時期後には更に列強の積極的援助が加強され、聯合して革命に向つて反攻したることによつて、太平天國をしてこの敵人の聯合進攻の下に敢へなく挫折せしめたのであつた。

これ等以上のことは、即ち太平天國失敗の原因であり、又同時に太平天國の教訓でもある。太平天國は失敗に歸したけれども、然し太平天國は却つて中國革命史上に於いて光榮悲壯の一頁を記録してゐるのである。それは中國ブル

ジョア民主革命の先驅であり、その持つ意義は我々にとつて今日も猶ほ依然として輝いてゐるのである（註2）。而して我々は太平天國の失敗を以つて餘りに太平天國を譴責し且つその光榮なる意義を抹消すべきではない。正に次のことだけは明瞭である。即ち當時中國の社會的條件のみが、唯だよくこの様に偉大にして悲壯な結末に了つた太平天國革命運動を生むことが出来たのである。

一八五七年、馬克思・恩格斯は太平天國事件に對して次の様に論じた。『すなはち支那の社會主義はあたかも支那哲學がヘーゲル哲學に於けるが如く、確かにヨーロッパの社會主義に關係がある。然しながら、地上に於いて最も古く且つ最も搖ぎなき帝國が、イギリス資本家のキャラコ侯によつて、ここ八年間にして兎も角も文明にとつて、極めて重大な結果を齎さなければおかない、一つの社會的變革の前夜にまで持ち來された、といふことはまことに愉快な事實である。我がヨーロッパの反動主義者が最も近き將來、必ず亞細亞に逃避し、遂に支那の萬里の長城に辿りつき、正にこの原始的反動と原始的保守主義とのバリケードの門口に到達したその時、彼等はその上に次の如き大文字にぶつからぬと誰が保證し得るであらう。「支那共和國——自由・平等・博愛」』（註3）

事實上太平天國は、正にこの中華共和國を創造する先觸れであつた。彼等は既に『自由・平等・博愛』のこの數個の大文字を歴史に綴り始めてゐたのである。太平天國は失敗したけれども、然し太平天國の激烈の流血は、却つて中國歴史の新篇に紅の色を染め始めたのである。

太平天國は運動の中途に於いて、或る上層分子は腐敗し始め、或る上層分子（例へば韋昌輝）は自ら殘殺し合ひ、或る上層分子（石達開の如き）は太平運動の分裂を進めて、太平軍の多くの精銳をして出口のない道に落とし込み、又

或る上層分子（錢江の如き）は中途にて變節した。けれども而も太平天國は歴史上に於いて、又彼を歌ひ、彼がために泣くべき幾多の民族の英雄を記録し留めたのである。

例へば李秀成等の如き、彼等は滿朝の敵人の面前に於いて、西歐列強の面前に於いて、堅決して屈服することなく、實に長く我民族の後繼者のために讃ふるに足る模範となつた。中華民族は永遠にこれ等の英雄たる祖先を忘却することは出来ないであらう。

これに反して、曾國藩・李鴻章流の如き、彼等は異族朝廷のために忠を盡し、外國侵略者の軍隊（ゴールドン軍）の先導に立つて太平天國の男女を屠殺し、既に歴史に最も恥づべき名を書き留められたのである。

正に孟子の言ふところの「名はこれ幽厲と云ひ、孝子慈孫と雖も百世改むる能はざるなり。」以上記した歴史が我々にとつて、今日如何なる重要な意義を持つかは、言はずしてこれを察知し得ようと思ふ。

譯註

1、三合會七首黨との關係は第四章第四節 譯註2參照。

捻黨の亂は咸豐以前既に嘉慶同光時代より農民一揆として始まつてゐたのが、太平天國によつて一層激化したものである。この亂は同治七年太平天國鎮定後に屏息した。太平天國がこれを積極的に利用しなかつたのは、上述の三合會と共に首領洪秀全のプチ・ブル的潔癖性の中にある様に思はれる。彼は前述の如く永安より南京に向ふ途次に發した『吾々の行動に乗じ地方の匪徒動亂を起すあれば、汝等人民直ちに報知せよ。我等は直ちにそれを絶滅しよう』と云ふ公式的

宣言に終始した。然し東王楊秀清亡き後もつとも強固な指導力をもつてゐた忠王李秀成はその戦争の後半期明かに捻黨と積極的に結合して革命を完成しようとする努力し、事實この結合に向つたのであるが既に大勢を挽回しえなかつた。

稻葉「近世支那十講」第二一二頁（リンドレイ「太平天國」より）

矢野「近代支那史」第三八四頁

2、『かくて、帝國の舊都の前に、約十萬の軍勢は、宗教上の希望と政治上の目的、即ち市民の自由、信仰の自由などと云ふ人間が有する最高最貴の大望を懷いて、團結集合したのであつた。』（ザイクトリア僧正）

(F. Lindley: "Ti-Pin Tien Kwoh")

3、(一八五〇年・ロンドン)馬・恩全集 邦譯第四卷第五六七頁

又、一八五三年に、

『歐洲に於ける次の叛亂、即ち共和的自由と冗費なき統治のためのその運動が、天上の帝國（支那）に於て、歐洲の對蹠的支那に於て、現在演ぜられつゝある革命運動に依據する程度は、恐らく支那以外の何處かに存在する政治的契機、例へば手近かなロシアの脅威自身並びにそれに關聯せる廣汎な歐洲戦争の危機などに於けるよりも遙かに多大である。』（支那及び歐洲に於ける革命）

然し乍ら一八六二年に、

『彼等の目的は保守的老衰に對して、異常に恐るべき形の破壊、新建設の何等の萌芽もない破壊を企てる以外のものではない様に思はれる。』と訂正してゐる。即ち『一八五三年代の支那に於ては工業労働者階級の端緒すらもなかつた』から。（右全集六卷第四七五頁）

東亞問題別冊第二

昭和十五年一月廿一日印刷
昭和十五年一月廿五日發行

定價 五十錢
(外地 五五錢)

譯者

山本一郎

發行者

東京市神田區鍛冶町三ノ六鍋町ビル
鐵村大二

印刷者

東京市四谷區本村町四番地
鈴木芳太郎

印刷所

東京市四谷區本村町四番地
玄眞社印刷所

發行所

東京市神田區鍛冶町
三丁目六鍋町ビル
株式會社 生活社
(振替東京四三三〇一番)

東亞問題別冊第一

戴季陶著
中山志郎譯

孫文主義の哲學的基礎

定價五〇錢
送料三錢

東亞新秩序建設の支那に於ける擔當者としての新支那中央政府が、孫文の正繼をもつて任ずる汪兆銘を主班とし、所謂純正三民主義の基礎に立つものとすれば、その純正三民主義の根本的な究明理解こそ何をおいてもなされねばならぬところである。重慶政府によつて歪曲された三民主義を、その純正の發展方向に於て究明することはたゞに中國にとつてのみならずまた我國に課せられた重大な任務でもあらう。

これ本誌が中國に於ける三民主義の指導的理論家たりし戴季陶の「孫文主義の哲學的基礎」を翻譯刊行し、以てその究明理解の一端に資せんとする所以に他ならない。

25236



¥ .50

太平天國